濟生

SAISEI

THE NEWSLETTER of
Social Welfare Organization
Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.

No.1136

能登半島地震
［速報］
災害対応・災害支援

2
February 2024

社会福祉法人 恩賜財団 済生会

https://www.saiseikai.or.jp

済生会の不易流行論

185

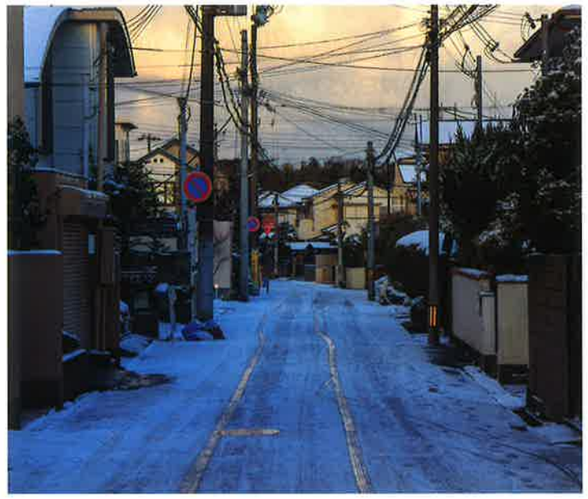
理事長 **炭谷 茂**
Shigeru Sumitani

高齢者介護の漂流

30年前から交流のあるAの今年の年賀状は、二つの住所が併記されていた。一つは従来の東京の住所、もう一つは関西のものだった。後者には母親の介護のため滞在中と添え書きがあった。

50代のAは、30年余り勤めていた会社を早期退職し、故郷に帰った。夫人の勤務や子どもの通学のために東京の住居は残したままである。退職で大幅な収入減のうえ、二重生活による支出増で生活は楽ではないだろう。

もっと心配になるのは、男一人で80歳を過ぎた母の介護ができるかだ。軽度の認知症があるので、火の始末が心配だと聞いた。介護保険の訪問介護やデイケアを利用しているようだが、十分な介護ができているのだろうか。



Aのようなケースは、最近よく耳にする。介護離職は、年に10万人を超え、増加している。平成27年9月に安倍内閣が介護離職ゼロにすると勇ましく宣言したはずだが、この方針は今も堅持されているのだろうか。

平成12年に介護保険制度が発足した。特養や訪問介護サービスが充実し、社会保障の重要部門を形成している。これで「介護の社会化」が定着し、高齢者も家族も安心だと喧伝されたものだ。

しかし、今では多くの問題を抱えている。なかでも財政問題だ。高齢者が急増し、介護給付費は12兆円を超えた。この負担の50%は国や自治体が税金で負担し、残りの50%は保険料で賄うが、現在は40~64歳の現役世代が27%、65歳以上の高齢者が23%を負担する。

これは介護保険制度の発足時に定められたルールだが、私は当時から「これは無理だ。早晩必ず限界に達する」と思っていた。特に高齢者の保険料負担である。保険料額は、介護給付費増に応じて増加する。被保険者一人当たりの全国平均保険料は、発足時が月額3千円程度だったが、今は2倍である。高齢者の大半の収入である年金は、このように増えていない。老齢基礎年金の満額の支給額をみると、平成12年の時より今は少ない。

今後とも介護保険料の負担が重くなるばかりだ。高齢者の生活は苦しくなり、負担の限度を超えることは疑う余地がない。

国は、介護支出を抑制するために介護サービスの縮小を進めるが、これでは介護保険の存在の意味が消えていく。介護離職や介護難民が増大することは避けられない。高齢者の福祉を毀損し、経済活動に重大な影響を与える。

ちなみに1968年に世界で最初に介護保険制度を制定したオランダは、保険給付の増大から2015年に制度改革を実施した。介護保険を廃止し、介護事業の大半を税による福祉サービスや医療保険に包含するようにした。日本も早急に介護保険の抜本改革に着手すべき時期だと思う。

不易流行（ふえきりゅうこう）：不易は永遠性、流行はその時々の新風をいい、芭蕉が俳諧思想を表現するときに用いた。
済生会は長い歴史で醸成された価値を大切にして、時代の変化に適応していかなければならない。

SMBC　SMBCグループ

昨日、
今日、
明日、三井住友銀行と。

昨日とは違う今日をはじめるために。
今日を未来へとつなげていくために。
私たちは、お一人おひとりの毎日を、
一つひとつの変化を、丁寧に見つめていきたい。
いつどんなときも、あなたにいちばん近い銀行でありたい。
これからもずっと、あなたの人生のパートナーであるために。

三井住友銀行

済生

SAISEI

CONTENTS

FEBRUARY, 2024

NEWSな済生人

済生会地域包括ケア連携士 目標の500人を養成 06

済生会本部　理事

松原　了さん

全国済生会地域包括ケア連携士会　会長
〈栃木〉宇都宮乳児院　院長

＋荻津　守さん

済生会交差点

《救急現場での看護の実践》プレホスピタルケアの要、ドクターヘリで活躍するフライトナース／《“伝わる”広報を目指して》医師の素顔が見える。こだわりの広報誌「ドクターズファイル」／《もの忘れ／認知症外来》地域の声に応え専門外来開設。個々に合わせた認知症治療を提案 10

速報　災害対応・災害支援

令和６年元日発生――

能登半島地震 17

巻頭コラム　済生会の不易流行論

高齢者介護の漂流　理事長 炭谷 茂 03

2月のたよりが聞こえる　コミミズク

表紙のことば　久保田眞由美 05

ソーシャルインクルージョン 26

この人　谷　真海 34

口福にっぽん　吉井省一 36

だれでもかんたん てづくりおもちゃ　いまいみさ 38

TOPICS 40

載々、大雑報 78

題字協力：石飛博光

アートディレクション：OVO INTERNATIONAL

2月のたよりが聞こえる　コミミズク

北極のツンドラや草原地から冬鳥として渡ってきて、10月下旬から3月ごろまで日本全国で見られるミミズクの一種。「野ネズミハンター」の異名を持ち、農家にとっては、害を与えるネズミを退治してくれるありがたい鳥である。〝コ〟ミミズクと言っても体長は約38センチ、それほど小さくはない。そもそもミミズクとは、フクロウ目フクロウ科で、生物学上はフクロウと同じ、違いは頭の左右にピンと立つ耳があるかどうか。この耳は「羽角」という飾り羽で、羽毛の束が立ったもの。本物の耳はフクロウと同じで、頭部側面の羽毛に覆われた場所に穴があある。コミミズクの由来は羽角が小さいことからである。

フクロウはメソポタミア文明では、夜目が効いて、首を左右に約270度ずつ回転させることができ、両目が正面にあって獲物までの距離を正確に図ることができることから、ネズミ・モグラなどを捕まえてくれ、「目の神」とされた。

古代エジプトでも、トト神というフクロウの姿をした知恵の神が存在し、大昔から神の使い鳥として登場する。加えて、古代ギリシャでは、女神アテネを守護する鳥として信仰され、現代でも「知恵」の象徴に用いられている。初期のローマでも女神ミネルヴァの化身として同様に扱われた。

一方、初期以降では魔女の使いで「死」の象徴。皇帝アウグストゥスの死は、その鳴き声で予言されていたという話もある。中国では、母親を食う不孝な鳥とされ、冬至にとらえてはりつけにし、夏至には食材にして、その類を絶やそうとした。日本も同様に人家に近くいるときは凶であり、父母を食い、人間の爪を食うとされていた。

しかし、明治以降、ギリシャや初期のローマなどの西洋文明の影響を受けて「幸福」の象徴とするイメージに変化し、今では苦労しない「不苦労」や福が来る「福来郎」などの字を当てて縁起物にもなった。

プラスとマイナスの両者のイメージを持つフクロウ。素顔はどちらに近いだろう。私には目がクリクリ、羽はフワフワなかわいいイメージしかなかったのだが。（N）

表紙のことば

願いに向かって飛んでゆけ

表紙イラスト　**久保田眞由美** *Mayumi Kubota*

「梟」この漢字を見ているだけで、木の上で時々首を傾げて黙想する姿が思い浮かぶのではないでしょうか。フクロウは「知恵」や「賢者」の象徴として物語にも登場します。今回はコミミズク。正面に顔を向けて飛ぶ姿は独特。どうやら平らな丸い顔はパラボラアンテナのように周りの音を集めているようです。小さな声も聞きもらさずに「不苦労」「福来郎」、願いの聞こえる方に飛んで行きますように。

NEWSな済生人 Interview

“済生会らしさ”のある地域包括ケアを

済生会の理念を体現するために創設した本会独自の資格「済生会地域包括ケア連携士（以下、連携士）」。2016年度に養成が始まり491人の連携士が誕生、目標養成人数の500人をほぼ達成しました。連携士の役割や活動、今後の展望を済生会本部の松原了理事、全国済生会地域包括ケア連携士会会長の荻津守さん（栃木・宇都宮乳児院院長）に聞きました。

（本部　社会福祉・地域包括ケア課　課長心得　鈴木孝尚）

鈴木　私は社会福祉士として当初から連携士養成プログラムの作成に関わってきました。改めて連携士とはどういった資格でしょうか。

聞き手の鈴木孝尚さん

松原　済生会の「誰一人取り残さない」というソーシャルインクルージョンの理念や、医療・福祉の総合的なサービスを提供する特長を生かし、生活困窮者を支えるため、コーディネート役として、多職種や企業・行政などの多機関と連携し、地域包括ケアを推進します。

鈴木　どういった人を支援するのですか。

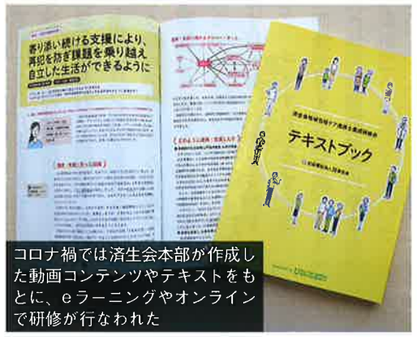
松原　地域包括ケアの対象者は高齢者と思われがちですが、地域には障害を持つ人、刑務所出所者、ホームレス、DV被害者、貧困家庭の子ども、医療的ケア児などさまざまな問題を抱える人がいます。こうした社会的支援を要する人を「生活困窮者」として、幅広く支援対象としています。特に済生会は制度の狭間（はざま）ですくい上げられない人にも手を差し伸べる重要な役割があります。

鈴木　連携士には支援者をつなぐコーディネート役も求められているのですね。

松原　生活困窮者の問題は複雑化しています。済生会だけでは解決が困難なことも多々あります。そのため連携士は関係者をつなげる調整役となり、課題解決に向け活動します。連携士の約半数はMSWですが、福祉施設の生活相談員、看護師、事務職など多様な職種がいます。

荻津　当院からは今年度の養成研修会を公認心理師が受講しました。乳児院は子どもの養育が難しい家庭に社会福祉士、公認心理師、看護師、保育士などの多職種が関わり支援を考えます。あらゆる問題に対応できるような多職種連携が求められています。

MSWや看護師、福祉施設の相談員などが受講する地域包括ケア連携士養成研修会。高齢・障害・児童・生活困窮者など幅広い支援を多職種連携で行なうことを学ぶプログラムとなっている



コロナ禍では済生会本部が作成した動画コンテンツやテキストをもとに、eラーニングやオンラインで研修が行なわれた

鈴木　連携士の具体的な活動を紹介してください。

荻津　宇都宮乳児院では、引きこもりやヤングケアラー、養育困難家庭への支援、こども食堂やフードバンクとの連携などを行なっています。宇都宮病院ではいわゆる「生理の貧困」に対して、常設の相談窓口や地域での臨時相談窓口を設置し生理用品を無料配布しています。ただ、真の目的は生理用品を渡すことではありません。困っている女性のための相談支援につなげることです。

鈴木　と言いますと？

荻津　生理用品が買えないということは生活に困難を抱えていることの表れです。そうした問題をすくい上げるため、窓口に来た一人ひとりに声をかけ支援につなげています。どこに相談すればよいのか、何に困っているのかも分からないという声も多いです。

鈴木　無料配布が目的ではない？

荻津　コロナ禍の初期、宇都宮病院に搬送される若い自殺企図者が増えたのを目の当たりにしたMSWが「何とかしたい」と声を上げたのが始まりです。残された家族や友人が「なんで相談してくれなかったの」と悔やむ姿を見て、死を選択する前に悩んでいる人が相談できる場所があるということを知ってもらいたいと考えたのです。

鈴木　そのために何をしたのですか？

荻津　まず食料品を配布する機会を設け、訪れた方に困りごとがないか声をかけて支援につなげました。その後、「生理の貧困」が話題になったこともあり、生理用品も配りながら済生会が独自に相談支援活動を開始。のちに「つながりサポート女性支援事業（つなサポ）」として宇都宮市の委託事業となりました。

生活支援品の配布をきっかけにして困っている人の問題をすくい上げる

連携士の動画コンテンツを制作。活動事例を基に作成するので実践的な内容を学べる

※写真撮影時のみマスクを外しています

潜在的ニーズを見出す目を養い、各地で地域をつなぐ活動を

静岡県済生会の連携士が取り組む地域と連携した災害支援活動

鈴木　食料や生理用品の配布をきっかけに、その先の根本的な支援につなげるのが目的ですね。

荻津　生理用品（物）が買えないという事実の奥にある困難や複雑な課題は見ようとしなければ見えないし始まらない。そこを見出す目を養い必要な支援を考えます。そうすれば自ずと支援の方向性が見え、幅が広がり、連携先が増えて活動が進めやすくなります。

松原　これはとても重要な視点で、現場で地域の人々と接すると、そこから新たに課題が浮かび上がります。与えられた課題だけでなく、潜在的なニーズを見つけ出してこそ〝済生会らしさ〟のある支援と言えるでしょう。

鈴木　松原理事も個人として活動をしていると聞いています。

松原　東京・向島病院の職員たちと子ども食堂やフードデリバリー事業を手伝っています。届け先の狭くて靴がたくさん散らかっている集合住宅の玄関や、日曜なのに父親がいない様子からその家庭状況がなんとなくわかり、支援の本質を実感しています。

連携士の活動を理解し組織全体で取り組む

鈴木　荻津さんは第1回の養成研修会を受講し、2023年度に発足した「全国済生会地域包括ケア連携士会」の会長で第6回研修会に講師として登壇しています。研修の内容を教えてください。

荻津　事前学習として、eラーニング動画とテキストブックで過去事例など実践的な内容を学びます。障害児の母親へのインタビュー動画は受講生から好評でした。

鈴木　対面研修も反響がありましたね。

荻津　〝済生会らしさのある支援〟をグループワークで考えました。参加者が課題を共有し話し合うことで、研修が終わった後も仲間同士が連携できる、顔が見える関係を作れるよう工夫しています。

鈴木　研修の課題はありますか。

荻津　連携士の一人から、受講後に職場で何かやろうと思っても理解者がおらず、孤軍奮闘になると意見をもらいました。経営幹部にも当会のソーシャルインクルージョンの理念を理解し積極的に生活困窮者への支援活動を後押ししてもらいたいです。

鈴木　本部でも施設管理職向けに組織全体で活動を推進するための動画コンテンツを制作しました。

松原　私自身も前述の活動経験から住民から悩みを引き出すのは難しいと感じています。何度も通っているうちに関係性が生まれます。支援するには時間がかかる――。施設の管理職の方にはそうした状況を知ってもらいたいですね。

荻津　宇都宮病院は「つなサポ」等の支援活動が日本医療機能評価機構から評価され、病院機能評価の「医療相談への対応」の項目でSランク評価の認定を受けました。さらに「つなサポ」は、「地域共生社会」や「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」の地域における実現に向けての先駆的で現実的な支援事業として評価されています。施設としてもメリットがあり、評価される活動だということを施設管理者にも知ってもらいたいです。

鈴木　2023年6月に発足した連携士会は、まさに連携士の横のつながりを作り、情報交換や相談ができるようにするのが目的ですね。

荻津　各施設の活動を共有し、先駆的な事例は真似して自施設の実践につなげてもらいたいですね。先行事例を参考にその地域らしさを出せば道筋が見えてきます。

連携士も一人で悩まないで

鈴木　連携士養成研修の今後の展望は？

松原　済生会以外の職員200人以上から受講の要望があり、本部の人材確保対策委員会で法人外への連携士養成研修が承認されました。連携士が目指す〝済生会らしさ〟のある支援活動、そして縦割りの制度に横串をさしてつなぐ役割は、厚労省が地域に求めている重層的支援体制整備のニーズにも合っています。

荻津　養成研修のテキストブックを外部の人に少し見せたところ「まさに実践そのものだ！」「地域で共有したい」と言われたことがあります。外部での研修が実現したら、地域の多機関と同じ目線で課題を共有し連携でき、さらに済生会のブランド力向上にもつながります。

松原　組織だけでなく、学生や医療・介護以外の会社員など個人にも連携士のことを紹介してみたいですね。自分の仕事以外でも誰かの役に立ちたいと思っている人は多いでしょうから、興味を持って関わってくれる人もいるのではないでしょうか。

鈴木　いいですね。最後に、連携士へメッセージをお願いします。

荻津　プレゼン力を鍛えてください。連携士から「職場で仕事が理解されない」といった相談を多くもらいます。「やりたい！」という思いだけではなく、なぜやりたいのか、組織としてやるべき理由、自分の意見や思いを伝える力を身につけてください。

鈴木　なるほど、組織として考えられることが大切ですね。

荻津　私たちは生活困窮者の方によく「一人で悩まないで、あなたは一人じゃない」と伝えていますが、連携士にも同じ言葉を贈りたいです。

鈴木　そのために連携士会もできました。

松原　支援がうまくいかず心が折れても、連携士会でアドバイスをもらう。連携士仲間で目標を共有する――。連帯が強く親しみやすい連携士会に育ってほしいですね。

2023年6月に発足した済生会地域包括ケア連携士会。荻津会長は「済生会らしい地域包括ケアを展開するため、連携士が各地域で活動できるよう支援できる会にしたい」と話している

唐津医療福祉センターでは連携士が中心となり、地元と連携した生活支援・介護予防などの活動に取り組んでいる。住民向けのリーフレットも作成

ボランティアとして貧困家庭への支援活動する松原理事

静岡県済生会支部内の連携士

唐津医療福祉センターの連携士

＊唐津医療福祉センターの活動は本誌2022年11月号、静岡県済生会の活動は同2023年5月号の「交差点」に収録

救命救急センタースタッフが当院前に集合

プレホスピタルケアの要

ドクターヘリで活躍するフライトナース

救急現場での看護の実践

滋賀県病院
済生記者
西澤真由美

筆者

当院は滋賀県の三次救急医療機関の一つとして、他院で受け入れ困難な重症患者さんに対応。2015年からは滋賀県全域・京都府南部での「30分以内での救急搬送体制」を確立するため、ドクターヘリの基地病院としてドクターヘリの使命は、医師をいち早く救急現場に運び、早期に治療を開始すること。機内に医療機器や医薬品を備え、傷病者へのプレホスピタルケア（病院前救急診療）とともに、医療機関への速やかな搬送を行ないます。交通事故や災害時などの医療救護活動にも威力を発揮します。

ドクターヘリに搭乗する看護師を「フライトナース」と呼び、医師（フライトドクター）や運航スタッフと連携して急病・重症患者さんのもとに向かい治療やケアを行ないます。

公的資格ではなく、基地病院が独自に定めた基準で認定されます。当院では看護師経験を5年以上、救急看護（救命救急センター外来・病棟、ICU）経験を3年以上有することや、救急に関する外部研修・院内のドクターカー・ドクターヘリ研修、OJTを経て一定の評価をクリアすることなど、多くの条件を満たす必要があります。

どんな経験もプラスにフライトナースに挑戦

23年12月現在、当院にはフライトナースが9人在籍。その1人、筒井美穂さんは3カ月間の院内研修を経て同年3月、フライトナースとして独り立ちしました。筒井さんは消化器外科の

「医療者として、人の命に携われる看護師でいたい。そして傷病者やご家族の不安を軽減できるような存在でありたい」と筒井美穂さん。ヘリの出動要請を待つ間は、ER（救急室）などで点滴や採血といった通常の看護業務を行なう

ドクターヘリ内の資機材・医療物品の点検・確認は業務開始前の大切な日課。活動に支障が生じないよう、その日のフライトドクターと念入りに行なう

混合病棟で看護師を8年間経験した後、当院に入職し救急部の所属となりました。そして救急部内の3部署（救急病棟、ER〈救急室〉、ICU）で働く中でプレホスピタルケアへの興味が高まり、ドクターカースタッフとして業務に携わることに。業務を通して同じプレホスピタルスタッフのフライトナースの活動を身近に感じ、憧れとともに「フライトナースに挑戦してみたい」と考えるようになりました。

しかし、果たして自分に務まるのか？——そんな不安と葛藤の中、信頼する上司に日々の業務での社会性や柔軟性を評価され、「挑戦するなら今だ」と踏み出せたからこそ、筒井さんのフライトナースとしての今があります。

救急部は3部署で協力をして成り立っているため、応援が必要な部署には流動的に人員が配置されます。普段はICUに所属する筒井さんですが、月3～4回のフライトナース当番の際はERに勤務。業務中にヘリ要請があった場合は迅速に対応できるよう、周囲のスタッフに協力を得て、スムーズな引き継ぎが行なわれます。

救急部内3部署すべての業務を覚える必要があるため苦労も多いはずですが、「プレホスピタルから搬送後の重症患者さんの管理まで一連の流れが学べるため、ドクターヘリの業務にも役に立っています」と筒井さん。どんな経験もプラスに捉え、日々の業務に取り組んでいます。

機内点検後、運航管理室でミーティングを実施。機長、整備士、CS（運航管理者）、フライトドクター、フライトナースで当日の天候、注意事項などを情報共有

ドクターヘリ出動時には必要最低限の情報しかないため、無線で患者情報を確認しながら現場に向かう

“伝わる”
広報を目指して

〈山口〉下関総合病院
放射線科映像情報室
臨床工学技士・認定医学写真技師
伊藤晋慈

医師の素顔が見える。こだわりの広報誌「ドクターズファイル」

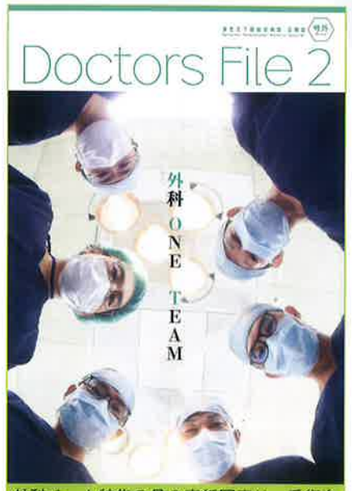
常に忘れない「看護」の心

ドクターヘリでは交通事故や災害などの緊迫した現場で活動を行なうことも多くあるそうですが、看護を提供するという視点で特に筒井さんの印象に残っているのが、フライトナースとして独り立ち後初めての現場です。1歳児の熱性痙攣での救急車要請があり、ドクターヘリも出動。患者さん・ご家族を乗せてきた救急車と合流したときには子どもの痙攣は止まっており、医療介入は必要ない状態でしたが、母親は着の身着のままの状態で同乗し、不安な表情で付き添いをしていました。

プレホスピタルケアでは傷病者への看護はもちろん、ご家族への看護も必要となります。ドクターヘリでの搬送の際、「お母さんもよく頑張りましたね」と声かけをすると、やっと安心できたのか、震えながら涙を流していたそうです。

「フライトナースは少ない情報から病態をアセスメントし、院外でできる最大限の治療を行ないます。もちろんそれも大事ですが、私は看護師として傷病者やそのご家族へ『看護』を提供できるよう今後も関わっていきたい」と筒井さん。どのような状況でも忘れない「看護」の心を筆者に教えてくれました。

生命の危機が迫る救急現場でも、治療と並行して患者さんやご家族への看護を実践するフライトナース。今回、その専門性の高い仕事の一端に触れることができ、同じ病院に働く職員としてとても誇りに思いました。■



外科チーム特集の号の表紙写真は、手術台の上に筆者が寝て魚眼レンズで撮影

当院は2021年7月から22年10月にかけて、診療科ごとの広報誌「Doctors File（ドクターズファイル）」を17冊発刊しました。

森健治・現院長が新たに就任した21年4月当時はコロナ禍真っただ中で、当院主催の講演会など多くのイベントが軒並み中止に。危機感を持った森院長が陣頭指揮をとり、当院の広報のあり方を見直すことになりました。

まず、広報活動や写真について造詣が深い心臓血管外科の伊東博史副院長を広報委員長に選出。そして他院の広報活動事例も参考に、地域の医療機関の医師に意見を聞くなどして、当院の広報における課題や問題点を洗い出しました。

その中で、医師の世代交代や大学病院からのローテーションの医師が多くなったことで、当院医師のパーソナリティーや得意分野などを地域の医療機関・患者さんに紹介できていないことがわかってきました。

そうした状況を受けて、当院の医師たちの得意分野について、主に地域の開業医、患者さんや家族に単にお知らせするだけでなく覚えてもらうこと、そして開業医の先生方から患者さんを紹介してもらうことを目的とした号外広報誌「ドクターズファイル」制作の企画が立ち上がりました。

❶まずは手に取ってもらえるように……
表紙は「おおっ!?」と思わせるインパクトあるデザインを意識し、写真撮影時のアングルやライティングにも気を使った。診療科ごとのキャッチフレーズもポイント

❷医師の素顔が“見える”直筆メッセージ
医師の経歴を載せるだけでなく、笑顔の写真とともに、どんな思いで医療に携わり患者さんに向き合っているのかを手書きしてもらった

❸目指せ！ショートムービー的簡潔さ
特集する診療科の“ウリ”、最新の治療法などをテーマに原稿を医師に依頼。写真中心にわかりやすく親近感のある誌面づくりを追求、“伝わる”言葉選びにもこだわった

当院ホームページでシリーズ全17冊を閲覧・ダウンロード可能

〝丸投げ外注〟せず自分たちで企画制作

基本形をA4判4～6ページのリーフレットとし、常勤医師がいる診療科ごとに原則1冊制作することが決定。1年間ですべての診療科のドクターズファイル（19部署・17誌）を発刊する計画を立てました。制作の基本方針は「写真中心に簡潔にわかりやすく」。当院ホームページでの掲載や院内デジタルサイネージへの転用も視野に入れ、ビジュアルで伝えることを目指しました。

各号の企画制作については外部の制作会社に〝丸投げ〟発注はせず、森院長・伊東広報委員長直々に筆者が所属する放射線科映像情報室を担当に指名してくださいました。

当室の主な業務は医学写真業務で、外来患者撮影から手術写真・動画撮影、摘出標本撮影、剖検撮影までこなしています。映像に精通していることから、広報業務の一環としてこれまでもホームページ制作を中心に、広報誌の表紙や各部署の行事等の撮影を行なってきました。

制作の流れとしては、まず、特集する診療科の特性やアピールポイントに合わせて、その号のコンセプトや原稿内容の構成を決定。その後は原稿を医師に

【上】2023年1月、「ドクターズファイル」全17冊完成を記念し森健治院長、平岡英樹事務長と広報委員会メンバーで撮影（後列右端が筆者）【下】現在の広報委員会は各部署から担当が集まり大所帯。院長・委員長のもと、侃々諤々（かんかんがくがく）の議論が沸き起こることも

筆者近影。23年12月、下関市立美術館での展示

依頼し、表紙・裏表紙と個人写真の撮影を行ない、決められた誌面レイアウトにはめ込んでいきます。

表紙のデザインは、院内ラックに各号の表紙が並んだときにそれぞれの診療科の特徴や強みが一目で伝わるように企画。書店のマガジンラックのような見せ方を意識しました。

写真撮影の際は、企画書を用意して医師にその号のコンセプトをプレゼンしてから撮影に臨むことで、こちらの意図が伝わりスムーズに短時間で撮影を進行できました。撮影はすべて病院内で行ないましたが、事前に撮影候補の場所をテスト撮影して綿密に計画を立てています。

広報誌撮影中の筆者。通常の医学写真業務の傍ら、多忙な医師の診療や手術の時間の合間をぬって活動

ドクターズファイルを見て受診する患者さんも

当院では定期的に院内誌「しおさい」（月刊）、院外誌「ふくふく」（季刊）を発刊しており、地域の開業医にはそれらの発刊に合わせてドクターズファイルを郵送。また、外来の待合スペース・病棟など院内各所に冊子ホルダー、1階正面の再来受付機横にラックを設置して周知に努めました。

手術中の医師の真剣な眼差し、患者さんに向けた笑顔、雑誌モデルのようなカッコよさ——診療科ごとの〝色〟を踏まえて毎号趣向を凝らした表紙・本文の写真は、当院職員や地域の施設、患者さんから大好評を得ることができ、手ごたえを感じました。

【左】小児科を特集した号の表紙（イエローが基調）。会議後のスキマ時間に多忙をきわめる医師全員に集合してもらい、ぬいぐるみも駆使して20分という短時間で笑顔の写真撮影に成功　【右】産婦人科を特集した号（ピンクが基調）の裏表紙には表紙写真のメイキングシーンを掲載

「医師の素顔を見て、ひとりが感じられた」と、ドクターズファイルがきっかけで受診したという患者さんも。医師それぞれの経歴紹介にとどまらず、医療や患者さんへの〝思い〟も伝えることができました。いかに患者さんへ配慮した視点を持って企画できるかが大事です。

今後も広報委員会を中心に、各部署や最新機器のPRなど、当院の魅力を効果的に発信するために活動していきます。

地域の声に応え専門外来開設 個々に合わせた認知症治療を提案

もの忘れ／認知症外来

〈東京〉向島病院
脳神経内科
荒川千晶

筆者

向島病院が位置する東京都墨田区は、昔ながらの下町情緒を色濃く残す地域です。区の人口は増加傾向で昨年28万人を超え（墨田区発表）、高齢化率は22・1％（令和2年国勢調査）と全国の高齢化率29％（令和5年版高齢社会白書）を下回るものの、年々上昇しています。

当院は102床の地域に根差した病院ですが、入院患者の80％以上、外来患者の60％以上を高齢者が占め、病院機能の柱の一つとして「高齢者の生活機能維持・向上を支援する」ことを掲げています。

こうした背景もあり、当院が連携する地域包括支援センターやケアマネジャーなどから「認知症の鑑別診断をしてほしい」「認知症の行動・心理症状に対応してほしい」「家族へのアドバイスをしてほしい」といった外来認知症診療の要望が当院に寄せられることが増加。地域のニーズに応えるため、令和4年7月に「もの忘れ／認知症外来」を開設しました。

当外来では認知症専門医（筆者）を中心に、認知症看護認定看護師（右端）、社会福祉士（左端）など多職種で患者さんとその家族のケアに当たる

丁寧に話を聞いて診断 家族のケア・指導にも重点

もの忘れが気になり患者さん自身で予約し受診する人、家族が本人の症状を気にかけ受診する人、ケアマネジャーや地域包括支援センターなどから勧められ受診する人など、受診に至る経路はさまざま。

当外来は週1回・完全予約制で、初診は40分、再診は20分の枠を設けて診療を行なっています。できるだけ多くの患者さんを診るために、はじめに鑑別診断を実施。問診や診察、検査などを通して、認知症の有無や原因疾患、重症度などを判定します。それらの結果を踏まえて治療方針の決定・見直しなどを行ない、個々の患者さんに合わせた治療を提案します。

薬の副作用がなく服用が無理なく続けられている、介護者が困らない程度に安定した状況が保てているなど、当外来で決定した治療方針による治療が軌道に乗った患者さんに関しては、地域のかかりつけ医の先生に逆紹介を行ないフォローアップをしてもらっています。しかし、認知機能の低下は加齢とともに進行を余儀なくされる病態でもあり、軽度の人でも3～6カ月に1回程度は再診していただき、当外来でも経過を追うようにしています。

現在、月に36人ほどが当外来を受診。患者さんからは「6カ月に1回でも定期的にこちらで診てもらえると安心」との声もあり、地域医療の一員としての専門外来の役割を実感しています。患者さんの家族からも「認知症について受診できるところができてよかった」といった話を聞くことがあります。

また、当外来の特徴として「家族へのケアや指導」に重点をお

静岡済生会総合病院DMAT隊員提供

令和６年元日発生

［速報］

能登半島地震

何が起き、どう動いたか。

〈福岡〉二日市病院JMAT隊員提供

静岡済生会総合病院DMAT隊員提供

滋賀県病院DMAT隊員提供

〈埼玉〉川口総合病院DMAT隊員提供

JKK東京（東京都住宅供給公社）と東京都済生会との包括連携協定に基づき、昨年6・11月にJKK住宅で認知症についての講演・個別相談会を実施

いています。「認知症の本人にどのように接すればよいのか」「無理なく介護を継続するためにはどうすれば？」など、家族が持つ不安を少しでも減らせるようにじっくりと話を聞き、その悩みや思いに寄り添う姿勢でアドバイスをするよう努めています。

認知症対応力を地域全体で向上へ

昨年9月、アルツハイマー病の新薬「レカネマブ」が承認されました。原因物質に直接作用し発症や進行を抑える疾患修飾薬が登場したことで、認知症診療は新たなステージに入ったといえます。レカネマブの投与対象は「アルツハイマー病による軽度認知障害及び軽度の認知症」であり、認知症疾患をできるだけ正確に鑑別することがより重要となってきます。

その一方で、病気が進行し「怒りっぽくなった」「物盗られ妄想がひどくて困っている」「夜中に家の外を歩き回って転んでしまう。どうしたらよいか」といった患者さんや家族の切実な声にリアルタイムに対応できるような外来を展開していくことも、地域を大切にする当院の大きな使命と考えています。

地域の認知症対応力を上げていくことで、地域連携が取りやすくなります。そのためには、認知症の患者さんが困っている現場でさまざまな職種の人が積極的に対応できるようになることが重要です。多職種・多機関を対象とした研修会を行なうなど、認知症患者さんの困りごとに対して地域ですぐに相談できる体制を整えていくことが求められています。

済生会向島病院
医療連携ニュース

もの忘れ／認知症外来

もの忘れが心配になってきた方、「認知症」と診断されて治療に通われている方、認知症の方の対応に悩んでいるご家族など、もの忘れや認知症に関しての診断や対応についてのご相談がありましたら、ご紹介ください。

問診や診察、検査などを通して適切に診断をし、個々に合わせた治療をご提案させていただきます。ご家族や介護者の悩みや思いにも寄り添えるように、ケアの側面からもお話ができればと思いますので、お気軽にご相談ください。

昆川千晶 医師（第2・第4土曜日）

日常生活で気になる症状や心配事に対応させていただきます。認知症およびその前駆期である軽度認知障害（MCI）を早期に発見し対応することで、認知症への進行をできる限り防ぐことができるよう、診察と治療、予防の提案をさせて頂きます。

山田碧 医師（第1・第3土曜日）

もの忘れ／認知症外来は、患者さんの診療に十分な時間を確保するため、完全予約制となっております。普段の生活状況を詳しく伺うため、患者さんの日常をよく知るご家族に同行していただけるようご案内ください。
外来予約、ご相談などは、お気軽にお問い合わせください。

地域医療連携室
TEL：03-3610-3664　FAX：03-3610-3729
〒131-0041　東京都墨田区八広 1-5-10

当院ホームページや広報誌等への掲載のほか、地域の連携施設宛に毎月送付する「医療連携ニュース」でも当外来の活用について周知

〈栃木〉宇都宮病院DMAT隊員提供

災害対応　**災害支援**

令和6年元日16時10分頃、石川県能登地方を震源とするマグニチュード7.6（気象庁暫定値）の強い地震が発生。石川県輪島市と羽咋郡志賀町では最大震度7を観測し、建物倒壊や道路破損、土砂災害、津波による浸水など、県北部中心に甚大な被害をもたらしました。全国の済生会病院・施設では、発災直後からDMAT等災害派遣チームの出動、被災病院の患者受け入れ、職員の派遣など被災地での支援活動をそれぞれ展開。現地の状況や活動内容の一部を報告します。

〈埼玉〉川口総合病院DMAT隊員提供

福岡総合病院DMAT隊員提供

令和6年能登半島地震

災害対応

〈石川〉金沢病院

発災直後に院内災害対策本部を設置 デイルームを近隣住民の臨時避難所に

済生記者　中川範彦

石川県能登半島を中心に、甚大な被害をもたらした「令和6年能登半島地震」。

当院が所在する金沢市でも震度5強を観測し、発災直後まもなく、院内職員、参集した職員を中心に災害対策本部が設置されました。

まず、入院患者さんの安全を確認。同時に、建物やライフライン、医療機器等の状況を確認し、エレベーターとガスが使用できないことが判明しました（発災当日に復旧）。そのため、患者さんの夕食に温かいものが提供できないことをお詫びし、職員が地下の調理場から5階病棟までバケツリレー方式で配膳しました。

また、発災時に大津波警報が発令されたこともあり、近隣住民約80人が当院に避難してきました。着の身着のままの方も多く、3階・5階のデイルームに臨時避難所を開設し、院内備蓄の毛布やマットなどを提供。院内売店の協力を得て、温かいおにぎりやパンも配布しました（翌日までには全員帰宅）。

災害対策本部　会議

3階デイルームに臨時避難所開設

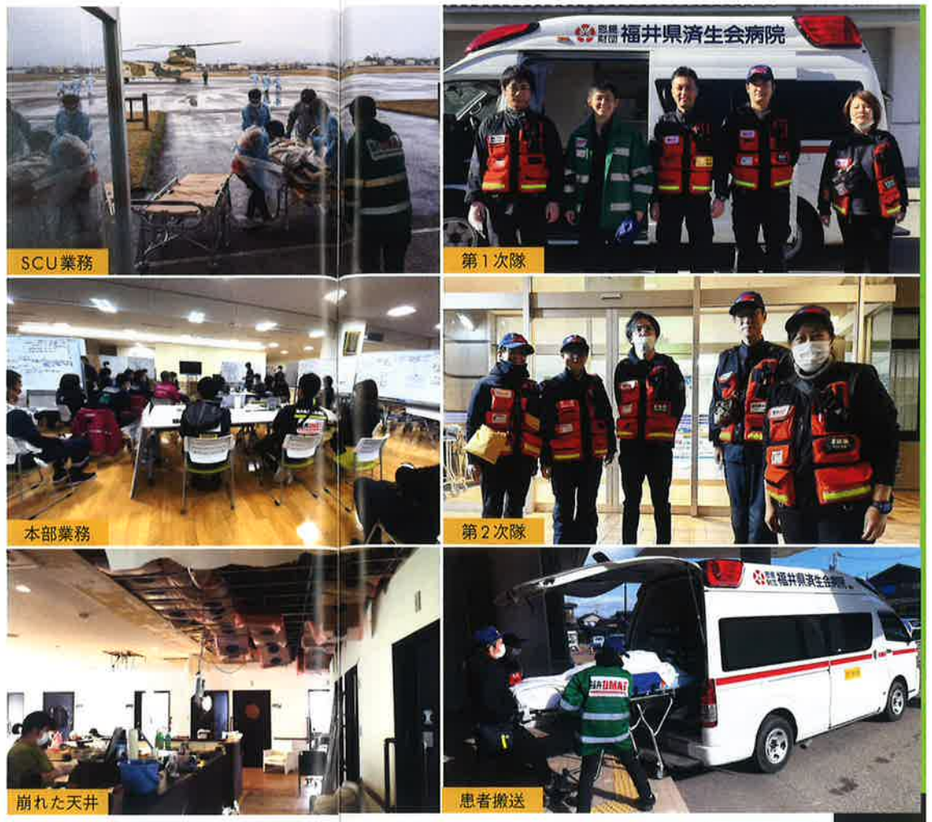
エレベーターが止まり、配膳リレーを行なう

被災地の透析患者受け入れ 1月3日から段階的に

発災当時、当院透析室では約20人の患者さんが透析中の状況でした。患者さんの安全確保、透析機器の正常な動作含め病院施設の状況確認が終わり次第、透析を再開。また、帰宅希望者に対して透析時間を調整するなどの対応を行ないました。

1月3日からは、ライフラインが寸断された能登地区から自衛隊による陸路の患者移送が始まり、市立輪島病院の透析患者15人の受け入れ要請が当院に入りました。

先発の患者さん7人が輪島、穴水を経由し陸路で当院へ出発。道路の破損や渋滞の発生などで、到着予定時刻を大幅に過ぎ深夜



SCU業務
第1次隊
本部業務
第2次隊
崩れた天井
患者搬送

令和6年能登半島地震

隣県からの支援

福井県 済生会病院

道路の通行が困難な中 被災患者の搬送のため奔走

済生記者 **田中一弥**

当院では福井県からのDMATの派遣要請を受け、第1次隊として1月2日から4日まで、第2次隊として4日から6日まで、医師1人・看護師2人・ロジスティクス（業務調整員）2人を派遣しました。

また、1月6日・9日にも福井空港へのSCU（広域搬送拠点臨時医療施設）設置および患者搬送のためDMATを派遣。さらには震災初期から福井県DMAT全体の調整をするため、福井県庁に看護師1人を派遣しました。

第1次隊は石川県立中央病院のDMAT活動拠点での本部活動に従事。被災患者を他病院へ搬送するための各医療機関との調整、患者の搬送、受け入れ患者数の全体把握などを行ないました。安堵（あんど）と不安が入り混じり、搬送時に涙を流す患者もおり、看護師が優しく寄り添いました。

第2次隊は町立富来病院の患者の搬送、介護施設の調査、支援物資の搬送などを行ないました。道路は所々ひび割れ、通行困難な場所も多数あり、トイレもままならない状況。1日中緊張が走る中での活動でした。

全国の済生会病院から職員の応援を受け、被災患者さんを受け入れる病床を確保（写真は岡山済生会外来センター病院の応援看護師）

中の到着となりましたが、最終透析から期間が空いている患者さんがほとんどだったため、朝方にかけて緊急透析を行ないました。

1月4日午前、後発の患者さん8人が当院に到着し、同日午後から透析を開始しました。

当院の透析患者さんの協力と透析室看護師の尽力により、1月15日現在、被災地からの透析患者さんは16人となり、月・水・金の同日に同部屋で透析を受けています。

石川県済生会 支部長 **村田拓也**

各地からの支援に感謝 復興へは長い道のり

これまでご心配をいただいた方々、ご支援をくださった方々に対し、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

1月15日現在、当院には被災者を中心に多くの患者さんが搬送されてきています。また、家族が被災している職員も少なくありません。そのような状況ではありますが、当院に求められる役割を、職員一丸となって果たしていきたいと考えています。

復興へはまだまだ長い道のりとなりますが、引き続き、ご協力をいただくことがあるかもしれません。その際は、どうぞよろしくお願いいたします。

令和6年能登半島地震

支援出動

静岡済生会総合病院

被災病院で緊急搬送の受け入れ体制整備

済生記者 **酒井あい**

当院では静岡県からのDMAT派遣要請に基づき、1月6～8日の3日間、医師1人・看護師2人・業務調整員3人（薬剤師・臨床検査技師・事務）の6人からなるDMAT隊を石川県輪島市へ派遣しました。

現地では、市立輪島病院で緊急搬送の受け入れ体制を整えるための搬送調整を主な任務として行ないました。被災地は土砂崩れなどのため道路状況が悪く、患者搬送に苦慮したそうです。

また、病院では断水が続いており、藤田勇介看護師は「衛生面の悪化だけでなく、トイレに行かなくて済むように食事や水分の摂取を控えてしまうので、慣れない避難生活で健康状態にも影響を及ぼすと改めて感じました」と振り返りました。

福岡 総合病院

県庁調整本部で患者搬送調整

済生記者 **冨永朋実**

福岡県が組織するDMATロジスティックチームの一員として、1月4日から8日までの5日間、救急科・久城正紀医師と西津將巨業務調整員が被災地で支援活動を行ないました。

1月4日福岡空港で出発式。石川へ向け出発する久城医師（左から3番目）と西津調整員（右から2番目）

2人は石川県庁に設置された調整本部で空路・陸路の搬送調整、医療搬送ニーズの収集、情報整理支援などを担当。各地から入る被災状況を把握し、搬送先選定など多くの患者搬送調整を行ないました。天候に合わせた大規模搬送が可能となるよう搬送フローを作成、適宜修正しながら対応しました。

久城医師は15日から空路調整のため再度石川へ向け出発。道路が寸断され陸路の交通に大きな被害が生じる中、空路での搬送調整は大きな役割を担っています。陸海空の自衛隊、海上保安庁、消防、警察など他機関と協力してけが人の搬送や医療担当者の振り分けを行なう司令塔として活動しています。

また、救命救急センター看護師・副田剛希係長は12日、看護師派遣要請を受け能登北部の病院へ向け出発しました。

ミーティングで指揮を執る久城医師

山形 済生病院

厳しい環境下での調整本部立ち上げ任務

HCU看護師 **前山義貴**

山形県からの要請を受け、当院からは医師1人、看護師2人、業務調整員2人が1月6～9日（移動日含む）、主に穴水町役場で活動しました。

能登医療圏のDMAT活動拠点から与えられた任務は、穴水町の避難所や施設などの巡回・診療など医療福祉を調整する本部を立ち上げること。直接診療に関わることはほとんどありませんでしたが、避難所や施設の巡回・診療が円滑に進められるよう体制を整え、調整を行ないました。

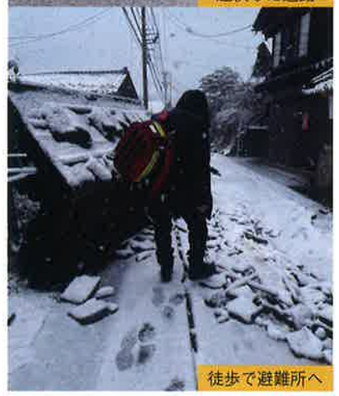
DMATだけでなくJMAT、薬剤師会、保健師、自衛隊などさまざまな組織とも協力し、地域医療・福祉を担う重要な本部を立ち上げることができました。

今回の出動は不慣れな任務に加え、ライフラインの途絶、悪路や雪など厳しい環境下でしたが、派遣された職員は皆、少しでも被災地の役に立てればという思いで精一杯活動を行ないました。今後も要請があれば、どのような任務でも行なえるよう備えていきます。

〈福岡〉二日市病院

地元医師とも協力 各避難所での健康観察・診察

起伏した道路


徒歩で避難所へ

済生記者 **久冨大史**

当院は日本医師会災害医療チーム（JMAT）の派遣要請に基づき、1月12日から15日まで職員を七尾市、穴水町、能登町に派遣しました。チームは医師1人・看護師2人・薬剤師1人（いずれもDMAT隊員）の4人編成です。

活動内容は被災地の各避難所のスクリーニングと医療ニーズの把握、体調不良者への治療など。2日間の活動（初日と最終日は移動日）で9カ所の避難所を回り、避難者の健康観察と診察を行ないました。

情報収集

移動時には交通渋滞や道路状況の悪化で徒歩での移動を余儀なくされる所も多数あり、被害の大きさをまじまじと実感したそうです。

被災地の医療施設は、各所からの物資や給水車の支援などを受けて診療を継続。避難所では地域の先生方が自施設の休み時間に訪問するなど、地域の人と全国から支援に来た人とが協力し合っていました。

〈栃木〉宇都宮病院

ドクターカーで出動し 支援物資も現地へ届ける

済生記者 **川原彩花**

1月5日、栃木県から第3次隊としてのDMAT派遣要請があり、当院は医師2人・看護師1人・業務調整員2人が派遣先の能登総合病院へ出発。停電等の状況下でも対応可能な大型バッテリーを搭載した当院のドクターカーで向かい、水や毛布等の支援物資も現地へ届けました。

当院の主な任務は、能登総合病院・石川県庁での本部業務支援でした。現場に出向く活動部隊へ任務を依頼し、活動状況の

〈大阪〉千里病院

発災翌日から支援活動 避難者の健康悪化懸念

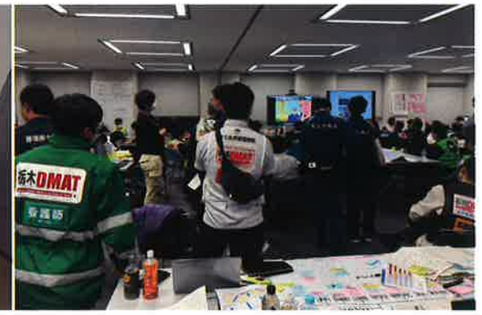
済生記者　秋山みゆき

災害時の医療支援活動を行なうNPO法人「災害人道医療支援会（HuMA）」の一員として、1月2日から7日まで救急救命士1人、1月4日から8日まで千里救命救急センター・伊藤裕介副部長、1月6日から11日まで同センター医師1人が、珠洲市宝立地区で医療支援活動を行ないました。

現地では地区の避難所のアセスメント、宝立小中学校内の避難所の運営支援と救護所の運営、周辺介護施設の往診を担当。「救護所で診察をした人の主訴の約半数は、発災時や避難時のケガ。通常なら病院で縫うような3～4センチの傷もティッシュで血を止めただけで、治療が必要な状態でした」と伊藤副部長は現地の状況について話しました。

常用薬を持たずに避難した高齢者も多く、偏った食事とストレスも相まって生活習慣病の悪化による災害関連死が危惧されています。要介護者は身体のみならず、精神状態の悪化もみられたとの報告もありました。

その後も、日本DMATの第4次隊の派遣要請、看護協会からの災害支援ナースの派遣依頼、厚生労働省DMAT事務局からの派遣要請があり、継続的に支援活動を行なっています。



HuMAの一員として活動する伊藤副部長

把握を行なう「活動指揮」として、現場から上げられた被災状況の把握・共有を行なうとともに、本部業務の運営の効率化等を行ないました。

被災地は道路の亀裂や陥没、積雪などによりアクセス状況が悪く、各DMAT隊の活動状況の把握等も難航したとのこと。

木村拓哉医師は「当院と同時期に活動していたDMATチームは約100隊。組織を超えた横のつながりを意識し、コミュニケーションや情報共有に努めた」と振り返りました。

〈埼玉〉川口総合病院

被災病院を活動拠点に 14隊のDMATが協働

薬剤部　佐伯文啓

一度紛失したが、自衛隊に発見されボロボロになりながらも手元に戻ってきたDMATステッカーとともに

埼玉県からのDMATの派遣要請により1月12～17日（移動日を含む）、第5次隊として医師1人・看護師2人・業務調整員1人の計4人が珠洲市総合病院を拠点とする医療活動を行ないました。

現地の病院職員たちは連日勤務等により限界に近い状況でした。病院機能を維持するため、当院を含む14隊のDMATが救急外来の診療支援や、発熱外来の支援、看護師・薬剤師の業務支援、患者さんの後方搬送（陸路、空路）などに介入。

当院は搬送班に所属し、金沢市への後方搬送や、職員への食料調達、輸送、看護支援などに従事しました。

実際の状況の悲惨さを目の当たりにし、改めて済生会人として、今こそ手を差し伸べるときだと感じました。

滋賀県病院

足りない人手や物資の中でもできる限りの支援活動を

済生記者　西澤真由美

1月3日の滋賀県からの派遣要請を受けて、翌4日から8日まで、奥村能城医師・西川里穂医師・勝又広太看護師・弥永彩有診療放射線技師・今安弘樹救急救命士の5人がDMATメンバーとして現地の支援にあたりました。

左から今安弘樹救急救命士、勝又広太看護師、弥永彩有診療放射線技師、西川里穂医師、奥村能城医師

今回DMATのミッションは、病院支援を指揮する「本部運営」、診療行為などの「病院支援」、被災病院から入院患者さんを別病院に搬送する「搬送支援」、避難所の状況を把握する「避難所調査」に関わる支援活動です。

1月4日早朝に現地に向けて出発した当院DMATは、公立能登総合病院に到着した後、穴水総合病院

活動指揮をする奥村能城医師

［左］準備した資機材をドクターカーへ　［右］物資の引き渡し

から物資を調達。続いて能登町役場、珠洲市役所へ物資の受け渡しを行ない、活動拠点となる珠洲市総合病院へ移動しました。同病院に到着したのは出発から12時間後のことでした。

被災から124時間後に救出「希望の光を救いたい」

6日夜には、地震で倒壊した自宅家屋の下敷きになり、124時間後に救出された90代の患者さんの救命にあたりました。救出時の適切な処置がなければ命を落としていてもおかしくない極めて危険な状態でしたが、「被災地の希望の光」として何としても生き残ってもらいたいという強い思いで、リーダーの奥村医師の指揮のもと、複数のDMATが一丸となって治療にあたり、患者さんは一命をとりとめました。

奥村医師は支援活動を振り返り「非常に過酷な現場でしたが、その環境にずっと置かれている被災者、そして自身も被災者であるにもかかわらず医療提供体制を維持しようと頑張る医療スタッフのために、できる限りのことをできたのではないかと思います。それぞれの力を尽くしてくれたメンバー、当院で後方支援を行なった職員の皆さんに感謝したいです」と述べました。

［左］救出された患者さんの状態を確認する西川医師と勝又看護師　［右］救命した患者さんの搬送を見送る西川医師

必要な情報発信を行なう今安救急救命士と弥永技師

ソーシャルインクルージョン

済生会はソーシャルインクルージョン推進計画を策定しました。無料低額診療もなでしこプランも、この中に含まれます。だれも排除されないまちづくりを目指し、全支部・施設が1696事業を展開します。

市内2カ所でつなサポ 出張相談会・生理用品配布会

〈栃木〉宇都宮病院

宇都宮市つながりサポート女性支援事業の一環として、11月19日は宇都宮市南図書館で、21日は平石地区市民センターで女性のための無料相談会兼生理用品配布会を開催しました。

19日は4年ぶりに開催された「南としょかん祭」に出展。宇都宮乳児院のほか、栃木県の社会福祉士会、精神保健福祉士会、NPO団体と協働しました。つなサポのブースには子連れの家族など約400人が来場。育児・子どもの将来への不安や、物価高騰での経済的不安を訴える人が多くみられました。

21日は36人が来場。この日も生理用品を十分に手に入れることができない方々に多くの生理用品をお渡しすることができました。

「生理痛の薬も高いので、生理用品等の物品支給の支援はとてもありがたい」「子育てと仕事の両立支援体制を、行政にもっと考えてもらいたい」といった声をたくさん聞きました。

（地域連携課　秋山綾香）

〈大阪〉吹田病院

多様な性について考えよう 院内教育研修会で講演

「多様な性について考えよう」をテーマに、11月30日、院内教育研修会を開催し59人が参加しました。

講演は2部構成。「多様な性のあり方を考えるワーキンググループ」メンバーの小児科・小川哲科長と、リハビリテーション科の奥光聖理学療法士が講師を務めました。

第1部では、小川科長が「言葉の正しい意味を知って多様な性を理解しよう」、奥理学療法士が「多様性って何だろう?」と題して、多様な性を表現する言葉と多様性を受け入れることの大切さについて講演。第2部では、小川科長が「言葉の正しい意味」について引き続き説明しました。

当日は、WGメンバー全員がレインボーバッジとLGBTのシンボルでもあるユニコーンのTシャツ、そしてユニコーンの着ぐるみで参加者を迎えました。

（多様な性のあり方を考えるワーキンググループ　岡利悟志）

権利擁護・地域生活定着支援セミナー 支援対象者に一層の理解を

大分県地域生活定着支援センター

大分県・県社会福祉協議会との共催で12月16日、権利擁護・地域生活定着支援セミナーを大分県総合社会福祉会館で開催しました。

本セミナーは年1回開催しています。本年度は対象者の多くが抱える「依存」の問題について、神奈川県立精神医療センターの小林桜児先生による講演、また県の依存症対策担当者による事業説明がありました。

会場とオンライン合わせて150人以上が参加。「生きづらさに焦点を当てた関わりが必要とわかった」などと好評でした。

（相談員　黒木晃平）

更生保護で法務大臣感謝状

鹿児島病院

当院に法務大臣から感謝状が贈られ、久保園高明院長が12月12日、鹿児島県更生保護功労者顕彰式に出席し、受け取りました。

当院は無料低額診療事業のほか、更生保護施設入所者へのインフルエンザ予防接種や入職時健康診断を「なでしこプラン」として取り組んできました。鹿児島保護観察所によると、このような永年にわたる取り組みは管轄内唯一とのことで、その功績が認められたそうです。今年度は更生保護施設以外の更生保護関係機関からの相談も増え、当院と更生保護関係機関とのネットワークも広がりました。

（済生記者　竹中康代）

〈栃木〉宇都宮病院

在留資格のない外国人の無料健診 MSW8人が相談支援

NPO法人北関東医療相談会の主催する「生活に困窮する外国人の為の医療相談会」（無料健診事業）が、12月10日に茨城県笠間市のカトリック支部教会で開催されました。

当日は県内外から来場した在留資格のない外国人89人に対し、医師や看護師による血液検査や問診などを実施。済生会からは関東ブロックMSW研究会の共同支援事業として、5施設（習志野病院、龍ケ崎済生会病院、常陸大宮済生会病院、宇都宮病院、宇都宮乳児院）のMSW8人が参加し、弁護士とともに相談支援を行ないました。

相談内容は、病気への不安や経済的な問題、在留資格に関する問題など多種多様です。

腎臓結石などの持病を抱えるイラン国籍の男性は「健康のことが心配だったので感謝している。病院に行っても診察を断られることが多く、普通の生活がしたい」と話していました。

（地域連携課　秋山綾香）

山口刑務所で実務者研修 修了生は56人に

山口地域ケアセンター

受刑者の社会復帰支援と再犯防止を目的とした「介護福祉士実務者研修課程」が12月15日に修了しました。当センターと山口刑務所は2015年に協定を結んでおり、今年までで計56人が資格を取得しました。

福祉・医療の現任講師から直に知識・技術を学べるため、研修参加者からは「思いやりや気遣いが必要とされる場所で、自分もその一員になれたら頑張れる」「1日でも早く出所して介護福祉士を目指したい」など、再スタートへの期待を膨らませた感想がありました。

一方で「チャレンジしたいが高齢なので採用は難しいのではないか」と不安を抱く人も。彼らが就労を希望した際は、本会のみならず他施設でも温かく迎えられることを希望します。

（総合企画課　広報係主任　西川愛子）

〈愛媛〉松山病院

愛媛県SDGs推進企業に登録 医療機関として初

当院は10月16日、愛媛県SDGs推進企業として登録されました。

登録に当たりSDGs達成に向けた宣言書を作成。重点的な取り組みとして「無料低額診療事業の促進」「済生丸巡回診療事業の実施」「誰もが働きやすい環境づくり」「ペーパーレスの推進」の4項目を掲げています。

毎年、SDGs達成に資する優れた取り組みを行なう県内企業等を選定し表彰する「えひめSDGsアワード」が開催されています。将来的にはこちらの受賞を目指し、積極的に活動していきます。

（経理課・経営企画室　山中信也）

ブラジル人学校健診セミナーで長嶋名誉院長が講演

愛知県済生会リハビリテーション病院

「ブラジル人学校における学校健診セミナー」が12月7日にオンラインで開催され、当院の長嶋正實名誉院長が講演しました。

外国人学校は「学校保健安全法」の適用外で学校健診が義務付けられておらず、児童生徒が健診を受ける機会がありません。

そのため、当院では以前からそうした外国人学校3校に対して学校健診を実施しています。

長嶋名誉院長は10年間の健診結果や今後の課題について取り上げ、肥満や視力に問題のある児童生徒が多いこと、また保護者と児童生徒には健康教育と健康への関心を高める努力が必要であることを説明しました。

今回セミナーは、外国人学校、地域の医療機関・自治体が連携して健診を実現した事例を発信し、外国人学校の保健衛生環境の向上が目的です。

（主事　医療福祉・地域連携課　渡邊祐実）

健康相談事業に対し更生保護委員会から感謝状

岡山済生会総合病院

当院がなでしこプランの一環で行なっている更生保護施設での健康相談事業に対し、昨年12月、中国地方更生保護委員会から感謝状をいただきました。

岡山県内には岡山市と津山市の2カ所に更生保護施設があり、岡山市の施設には奇数月に当院、吉備病院、昭和町健康管理センターが交代で訪問し、健康相談を実施しています。

若年層では「安心して仕事に就けるように」と施設職員から受診を勧められることが多いとのこと。

「医療面で更生保護施設に入所されている方々の社会復帰や、自立の支援ができれば」と医療福祉課・瀬崎弓子課長代理は話しました。

（済生記者　髙畑貴子）

塩出純二院長（左）と瀬崎課長

更生保護施設で無料インフルエンザ予防接種

〈福岡〉飯塚嘉穂病院

過去最多18人

未成年専用の更生保護施設「田川ふれ愛義塾」（入所者20人）で12月2日、無料インフルエンザ予防接種を実施しました。医師1人、看護師1人、MSW2人で訪問し、過去最多の18人が接種しました。

本事業は今回で8回目。これまでの接種者は延べ102人を数えます。入所者の多くは自立に向けてアルバイトを行なっており、その休憩中に接種しに来る人や、接種後早々にアルバイトへ出かけて行く人もいました。

予防接種を通して感染予防と社会復帰を後方的に支援するという観点から、今後もこの事業を続けていくことで入所者が「さまざまな人々に支えられ、『一人ではない』と感じ、明るい未来に向かって歩んでもらえればと願っています。

（MSW　岡松佳央里）

コープみらいと連携してフードパントリーを実施

〈東京〉向島病院

12月8日、済生会と生活協同組合コープみらい（以下コープみらい）が昨年5月に取り交わした連携協定に基づき、コープみらいのフードドライブに集まった食料品を当院のフードパントリーに寄贈していただきました。

なでしこプランの一環としてフードパントリー「Merry Table」を毎月実施するようになって1年が経ち、設定した予約枠がすべて埋まるほどの盛況となりました。

地元企業や個人の支援を受けながら実施している「Merry Table」ですが、今後はコープみらいとも力を合わせてこの活動に取り組んでいきます。

（済生記者　加藤建志）

「きずなBOX」を設置フードバンク茨城へ食料支援

〈茨城〉常陸大宮済生会病院

当院はソーシャルインクルージョンの活動の一環で、11月27日から12月22日まで職員更衣室通路前に「きずなBOX」を設置し、職員から食料等の寄付を募るフードドライブを実施しました。

初の試みにもかかわらず、多くの職員の善意により食料品14点、段ボール4箱分が集まり、12月27日にフードバンク茨城へ届けました。

フードバンク茨城では、連携している自治体や社会福祉協議会等を通じた生活困窮者自立支援のための食品ニーズに応えるほか、児童養護施設等の福祉施設に調理用、おやつとして提供しています。

「年末年始を迎える時期に、物価高騰等の影響もあり、直接もらいに来る人も多いので非常に助かります」と、お礼の言葉をいただきました。

（総務課　笠井康宏）

フード＆学用品ドライブ計719品集まる

〈福岡〉飯塚嘉穂病院

第4回フード＆学用品ドライブ事業を11月27日～12月15日に開催しました。

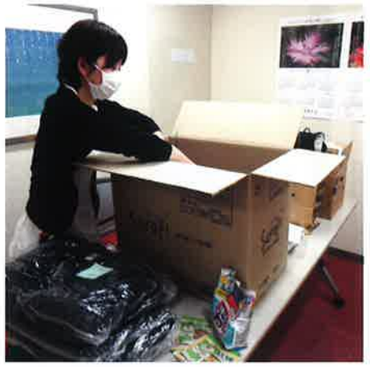
回を重ねるごとに品数は増え、今回は計719の食品・学用品が集まり、NPO法人フードバンク飯塚、フリースクール「みんなのおうち」、そして今回から嘉麻市社会福祉協議会にも寄付しました。

「みんなのおうち」では、食材配布会に学用品を一人一品プレゼントとして使用してもらったところ、スクラッチペーパーに希望者が殺到しました。また、嘉麻市社会福祉協議会に寄付した新品のクレヨンは感動を呼びました。（MSW　岡松佳央里）

〈大阪〉中津病院

生活困窮者支援団体へ日用品を提供

″くらし支え愛″活動

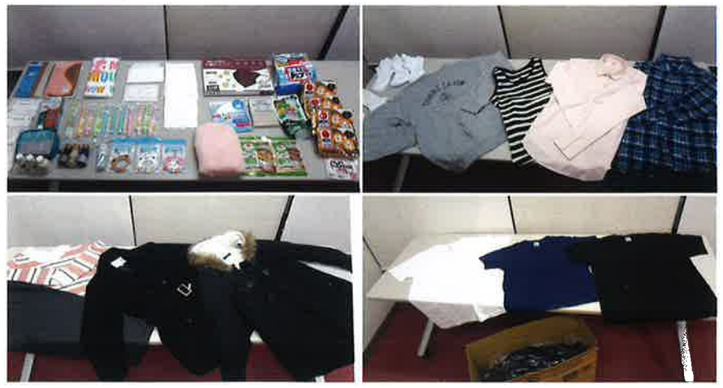


当院では11月20日から1カ月の間、未使用や使用可能な日用品の提供を職員に呼びかけ生活困窮者支援団体へ提供する「″くらし支え愛″活動」を実施しました。

看護部職員などから「今年も募集しますか?」「利用してもらえるとうれしいです」との声とともにTシャツ61枚、カイロ、マスク、レトルトの離乳食などさまざまなものが生活福祉相談室に届きました。

そこで、以前から連携を図っているビッグイシュー基金に相談し、1月11日に寄贈しました。女性支援や難民支援を実施している他団体ともシェアしていただくこととなりました。

（生活福祉相談室MSW　冨士川浩子）



フードバンクを通じて食料987品を必要な人に

〈三重〉明和病院

当院ではなでしこプランの一環として12月4日から15日まで職員から食料を募り、今年度2回目の食料支援事業を実施しました。

今回は病院の非常食も含め、食料品が987品集まりました。米農家をしている職員からはお米30キロ二袋の提供も。集まった食料は12月19日にフードバンクISEへ、20日にフードバンク松阪へ届けました。

今年度は前回と合わせ、約1500品を届けることができました。

（済生記者　藤岡拓人）

富山病院

初めてのフードパントリー

ひとり親家庭支援のために

ひとり親家庭を支援する目的で、12月17日に、当院で初めてとなるフードパントリーを開催しました。

当日は、職員20人と富山東ライオンズクラブ会員5人の協力を得て、訪れた約100組の家族連れにお米やお菓子、食器、タオルなどを手渡しました。

提供した品物は事前に職員へ呼びかけて集めたもの。

昨今の物価高の影響で、訪れた家族らは「何を買っても値段が高く、大変ありがたい」と話していました。

また、看護師らによる「ハンドマッサージ」「乳がんセルフチェック」も行ない、受けた人の「初めての経験で癒やされました」という言葉が印象的でした。（経営企画室　浅野由紀）

谷真海

MAMI TANI

19歳で骨肉腫を発症。
右足膝下を切断し、
「義足のアスリート」となった
谷真海さんは、笑顔を絶やさず、
周囲を明るくする
「スマイルパワー」の
持ち主でもあります。
病気をきっかけに起こった
人生の変化、
パラリンピックへの思いについて
お聞きしました。

Text：みやじまなおみ
Photos：安友康博

この人 Vol. 165

限界の蓋を外してチャレンジすることを病気が教えてくれた

たに・まみ　1982年生まれ、宮城県出身。早稲田大学在学中に骨肉腫によって右足膝下を切断。卒業後サントリーに入社し、走幅跳でアテネ、北京、ロンドンと3大会連続でパラリンピックに出場。2013年にはIOC総会の東京大会招致最終プレゼンテーションでスピーチを行なう。結婚・出産を経て、2016年からパラトライアスロンに転向し、翌年の世界選手権で優勝を飾る。東京2020パラリンピックでは日本代表選手団の旗手も務める。現在、サントリーホールディングス株式会社CSR推進部所属。

©竹見脩吾

大学生活でチアリーディングをエンジョイしていた青春真っただ中での発病。「もし病気をしなかったら、卒業後は普通にお勤めして、趣味でランニングなんかをしていたかもしれない。それがまさかパラアスリートになるなんて。足を失った代わりに命をもらい、こんな人生をまた生きていいんだと、むしろポジティブになれました」と笑顔で語る谷真海さん。

もちろん手術への葛藤も。「足は残したい。切断は最後の手段にしたいと思ったんです。でも、主治医から、手術をしなければ長くて1年半しか生きられないこと、義足を使えばまた走れるようになるといわれ、すっきりした気持ちで手術に臨むことができました」

医師の言葉を裏付けるように、義足になって2年後には、走幅跳でアテネパラリンピックへ。北京、ロンドンと3大会連続出場を果たした。その後、結婚、出産を経て、今度はトライアスロンへ競技を転向。周囲を驚かせたが、「長く続けられる競技だと思い転向を決めた」といい、東京大会へも出場。一昨年、第2子を出産した現在は、次のパリ大会を視野に練習を積んでいるという。

「正直、難しい挑戦だとは思います。でもあきらめたらそこで終わり。そういうときこそ踏ん張って、自分の限界の蓋を外してチャレンジするクセがついたのも、病気のおかげですね」

谷さんのさらなる飛躍に注目したい。

バラアスリート谷真海『切り拓くチカラ』（集英社）
かつて佐藤真海として、走幅跳でアテネ、北京、ロンドンのパラリンピック3大会に出場。2013年には東京オリンピック・パラリンピック招致プレゼンテーションでの名スピーチによって、一躍パラリンピアンを象徴する存在に。そんな彼女が、結婚と出産を経て、トライアスロン選手として再び夢の舞台を目指した背景とは？ 義足のアスリート谷真海さんの、東京パラリンピック挑戦の記録をまとめた一冊。

口福（こうふく）にっぽん

吉井省一

集中連載 未設置県の逸品 6/7

済生会は2023年度からスタートした「第3期中期事業計画」で支部未設置県の支部設立（復活）をビジョンに掲げています。

口福にっぽんでは3月号まで連続で、済生会支部未設置の7県の逸品を紹介します。

青森県では、青森や弘前などの西部を津軽地方、八戸や三沢などの東部を南部地方と呼びます。これは、江戸時代におおよそ津軽氏の弘前藩領だったか、南部氏の盛岡藩領だったかの違いから来ているようです。

青森を代表するねぶた祭りを初めて観（み）た時は、その大胆な絵柄と立体的な造作に圧倒されました。「ラッセラー」の掛け声も勇ましいハネト（踊り手）たちの踊りにも、青森県人の熱い魂のほとばしりを感じました。

そんな青森を代表する果物といえば、りんご。国内の収穫量の約6割が青森県産。戦後の日本復興を歌声で後押ししたのも「リンゴの唄」でした。今回は可愛（かわい）いりんごを使ったスイーツです。

りんご王国青森で発見、後を引く美味スイーツ

おすすめのアップルパイを作っているのは、弘前市にある「タムラファーム」。

77 紅玉のアップルパイ

《タムラファーム》 青森県弘前市

紅玉の自然の彩りが麗しい、大輪のバラを模したホールタイプの「ローズ」は、1日10個の限定品

岩木山麓に広がるりんご園で、陽光を浴びながら収穫を待つ、真っ赤な紅玉たち

〝すべての物語は、美味（おい）しいりんご作りから〟をキャッチフレーズに、りんご栽培から洋菓子作りまでを手掛けています。

寒暖差の大きい岩木山麓の弥生地区にある約1・3ヘクタールの広大な農園は、紅玉のりんご園としては弘前随一の規模。自家製有機質肥料を使った土壌作りから丹念に取り組んでいて、約800本の木に紅玉の実が生（な）る様（さま）はため息が出るほど見応えがあります。

このアップルパイに使われる紅玉という品種は、真っ赤な果皮が特徴。酸味の強さを生かし、加熱して甘みと風味を引き出すことで、パイやタルトなどのお菓子作りに活用されることが多い品種です。

美味しさを閉じ込めた紅玉をパイで包んで、一つひとつ丁寧に焼き上げていく。これぞ熟練の菓子職人たちの腕の見せどころ

済生会支部未設置県

よしい・せいいち　一般社団法人日本作詩家協会理事。コピーライター時代に老舗百貨店の食の通販誌で約30年執筆に携わり、試食した食品の数は1万点を超える。

この紅玉をソテーして蜂蜜とフランス産アップルブランデー「カルバドス」で味付けし、パイ生地とオーブンで焼き上げます。切り口の鮮やかな彩りを出すため、皮ごとソテーして果肉に色を浸透させているとのこと。

味は、シンプルに紅玉の風味を楽しめる「プレーンタイプ」と、パイ生地の底に生キャラメルを塗りクラッシュアーモンドをまぶして焼いた「アーモンドタイプ」の2種類があります。

弘前育ちの紅玉を使った濃厚な旨（うま）みと香り

そのまま食べても美味しいのですが、電子レンジで20～30秒ほど温めたり、トースターでカリッと軽く焼き上げると、焼きたてのアップルパイの味を楽しむことができます。パイ生地がより香ばしく、りんごの甘さも際立つためです。

それでは、さっそく「プレーンタイプ」からいただきましょう。ひと口食べると、パイ生地のサックリとした歯応えと、リンゴの果肉のジューシーかつシャキシャキした食感が、お互いの良さを引き出し合う絶妙な味わい。

市販のアップルパイにはシナモンで香りづけをしているものが多いのですが、こちらは使っていないので、紅玉そのものの味を楽しむことができます。アイスを添えると、まるでお店で食べているようなプチ贅沢（ぜいたく）感も味わえます。

次に「アーモンドタイプ」へ。りんごと生キャラメルの相性がこんなにいいとは知りませんでした。紅玉の酸味と生キャラメルの甘さが舌先でゆるやかに溶け合い、そこにアーモンドのカリカリした食感と香りがかぶさって絶妙なバランスを生み出します。

夏には冷蔵庫に入れて〝冷やしアップルパイ〟もおすすめとのこと。これなら一年中でもお取り寄せしたい。

りんごを知り尽くした農園だからこそ、秘めた美味しさを引き出せた「紅玉のアップルパイ」。自分へのごほうびだけでなく、手土産や贈り物にも喜ばれそうな逸品です。

紅玉のアップルパイ詰合せ（プレーン・アーモンド）

［内容量：プレーン（約100g）×3個、アーモンドキャラメライズ（約100g）×2個

2,484円（税込・送料別）　賞味期限……製造日より冷蔵7日

お取り寄せ・お問い合わせは

タムラファーム

〒036-8246 青森県弘前市大字青樹町18-28

定休日：日曜・祭日、お盆、年末年始

TEL：0172-88-3836（受付時間：9:00～17:00）

FAX：0172-55-8555（受付時間：24時間）

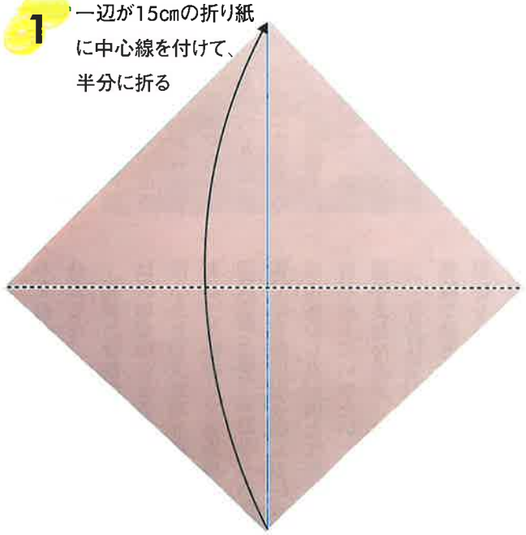
ホームページ：http://tamurafarm.jp/

幸せをよぶことり

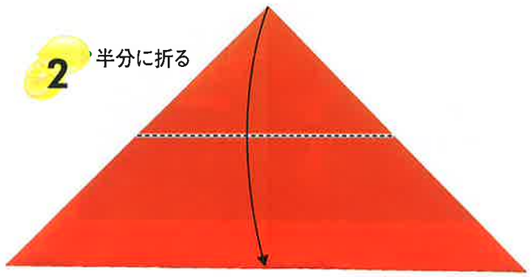
山折り
谷折り
裏返す

体

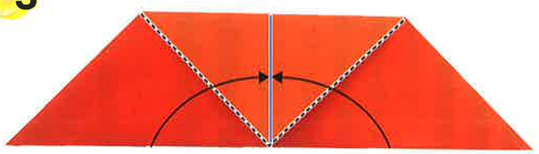
1 一辺が15cmの折り紙に中心線を付けて、半分に折る



2 半分に折る

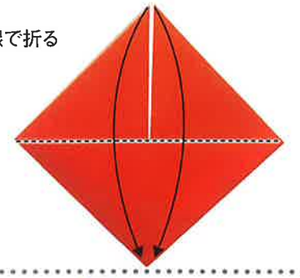


3 中心線に合わせて折る

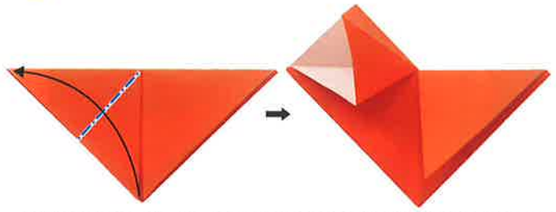


4 裏返す

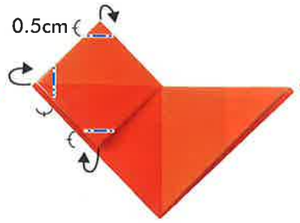
5 点線で折る



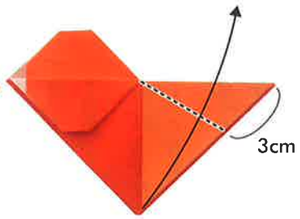
6 点線で折り開いてつぶす



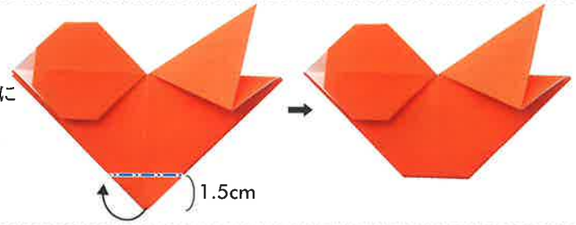
7 点線で後ろに折る。左のくちばし部分は、折り紙の上の1枚だけ後ろに折る



8 点線で折る



9 点線で後ろに折る



10 丸シールなどで顔を作って完成

くちばしのアレンジ

1 1/32に切った折り紙を点線で折る

2 ななめに折り目を付けて、点線で折る

3 裏返す

4 くちばしを顔に差し込み貼る

羽のアレンジ

⑧を4cmで折ってもかわいいよ♡

くちばしと体⑥から⑩までを左右反対に折ると顔の向きが右になるよ

【いまいみさ】手づくりおもちゃ作家。折り紙や牛乳パックなどをリサイクルして手づくりの楽しさを伝えています。著書に「365日たのしい折り紙」(日来書院)、「12か月のおりがみ髪飾り」(講談社)など39冊。最新刊は「1年中使える！決定版おりがみ図鑑」(講談社)。

動画もcheck!

作品・折り図：いまいみさ　おりがみ協力：株式会社トーヨー

〈福井〉特養聖和園で新年会を開きました。今年も笑顔と活気あふれ、喜んでもらえるデイサービスを目指します。

topics

医師の働き方改革・医療DX 先進事例を厚労省が視察

福岡総合病院

1月10日、施行を目前に控えた医師の働き方改革や政府の重要課題である医療DXの参考にするため、厚生労働省の濵地雅一副大臣を含む7人の政府関係者が来院しました。

当院からは岡留健一郎名誉院長、松浦弘院長をはじめとする各分野の担当者が応対し、働き方改革に関連する当院の取り組みを紹介した後、討議が行なわれました。

岡留名誉院長は「働き方改革は医師だけのものではなく、病院一丸となって取り組む必要がある」と助言し、濵地副大臣は「病院長主導で早期から病院全体で総合的に取り組んでいる姿勢に感心した。国としても丁寧に対応していきたい」と感想を述べました。

一行にはその後、AI問診体験や動画化された検査説明の視聴など、医療DXの有用性を体感していただきました。

（経営企画課　新田　怜）

★国からの評価は済生会のさらなるブランド力強化になったのではないでしょうか。

（本部広報室　河内淳史）

〈石川〉金沢病院

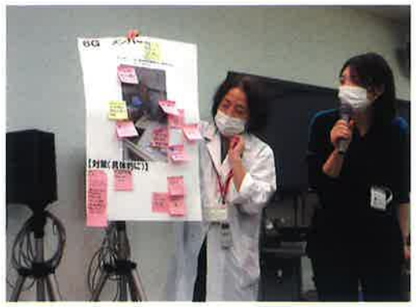
院内の転倒・転落を予測

「みんなで病院内の危険を予測しよう」と題して、12月20日、医師・看護師をはじめ多職種約40人が集まり、危険予測トレーニングを行ないました。

入院患者さんの高齢化が進み、転倒・転落件数が年々増加傾向にあります。病院の施設環境が患者さんに及ぼす危険要因を洗い出し、事故を未然に防ぐことを目的に企画されました。

グループワークでは、院内環境を元に事例を作成。各グループで活発な意見交換が行なわれ、さまざまな改善案が発表されました。具体的な改善策は、関連部署にフィードバックされ環境改善に取り組んでいきます。

（済生記者　中川範彦）



京都済生会病院

保健所と合同で災害訓練

新病院移転後初めての災害訓練を11月24日に乙訓（おとくに）保健所と合同で行ない、患者役なども含め75人が参加しました。

乙訓地域を震源とする震度6強の地震が発生したと想定。保健所を中心とする保健医療福祉調整支部の設置運営訓練と並行して、当院は院内災害対策本部とトリアージエリアの設置・運営訓練を実施しました。

災害対策本部では被災状況などの情報収集・EMIS（広域災害・救急医療情報システム）入力・クロノロジー作成（情報を時系列に記録）、トリアージエリアでは16人の傷病者に対するトリアージタグへの記載や診療エリアへの搬送を行ないました。

「当院は災害拠点病院として、災害発生時には乙訓地域全体の統括をしなければならない」と吉田憲正院長。今回の訓練結果をもとにBCP、災害対応マニュアルなどの見直しを進めます。

（DMAT事務局　吉丸和宏）

〈神奈川〉横浜市南部病院

もっと知ろう多職種チーム

多職種チームの活動を周知し、交流の場づくりと活動の活性化を図るイベントを12月22日に開き、職員93人が参加しました。

テーマは「もっと知ろう多職種チームとできること」。第1部は各チーム3分間の活動報告です。限られた時間の中で、13あるチームは皆工夫を凝らし、個性的に活動をアピールしていました。より詳しい内容はeラーニングで公開し、ハイパフォーマンスチームを投票で選ぶ予定です。

第2部は各チームメンバーをシャッフルした交流会です。他チームの活動について多職種が質問したり、悩みを共有したり、和気あいあいとした雰囲気の中で情報交換ができました。

（総合患者支援センター副センター長　嶋中ますみ）

〈山口〉下関総合病院

「頑張れ！　金沢病院」災害支援ナース2人を派遣

未曾有の災害となっている能登半島地震。傷病者や被害の大きい地域からの患者を受け入れている金沢病院に向け、当院も災害派遣の要請を受けました。

当院から先陣として派遣したのは、災害支援ナースの資格を持つ2人――DMATの派遣経験のある山本千晶副看護師長と、平成21年防府土砂災害時に災害支援を経験した大方涼子看護師です。

2人は1月18日に下関を出発。「防府の土砂災害時には、他県からの支援をたくさんいただきました。さまざまな疾患の患者さんを受け入れている金沢病院の力になれるよう、知識と技術を生かして頑張ります」と抱負を語りました。

（済生記者　下村桂子）

topicS

がん哲学外来　医師から心が温まる贈り物

福井県済生会病院

12月1日、当院メディカルカフェ（がんサロン）で樋野興夫・順天堂大学医学部名誉教授の「がん哲学外来」を開催しました。相談会には3組が参加し、約30人が講話を聴講しました。

樋野先生からは「病気であっても病人ではない」「人はがんとともにどのように生きていくのか」など、がん哲学という境地から深いお話がありました。

メディカルカフェの後半は、集学的がん診療センター顧問の宗本義則副院長がサンタクロースのコスチュームで登場。参加者にささやかなクリスマスプレゼントを配りました。

宗本副院長の暖かさと控えめなユーモラスさは、参加者の心をほっこりと温めたようです。

（済生記者　田中一弥）

〈神奈川〉横浜市東部病院

「脳卒中にならないために」市民講座に88人

市民公開講座「脳卒中にならないために　なってしまったときのために　脳卒中のリハビリテーション」を、12月10日、当院3階多目的ホールで開催しました。

4年ぶりの対面開催となり、88人の受講者が参加。講座は3部構成で、まず当院統括院長補佐の丸山路之医師が「脳卒中の仕組みと急性期リハビリテーション」と題して講演しました。続けて横浜鶴見リハビリテーション病院副院長の村松和浩医師による「一番大切な回復期リハビリテーション」について講演。最後に「鳥獣りは」（P.56参照）作者で障害当事者の村越正明さんを迎えて鼎談が行なわれました。

リハビリを乗り越え「鳥獣りは」の世界を創り出した村越さんのお話を、参加者の皆さんも熱心に聞いていました。

（済生記者　荒木愛美）

〈愛媛〉松山病院

チーム全員が一丸となってつかみ取った優勝杯

第44回全国済生会親善ソフトボール大会が11月19日、福岡市で開催され、当院は初出場・初優勝を果たしました。

当日は玄界灘からの強風の中、各ブロックを勝ち抜いた強豪病院を相手に、持ち前のチームワークとソフトボールを楽しむ姿勢で試合に臨みました。

緊張が解けない初戦の福岡病院戦では、走攻守がうまくかみ合い勝利。準決勝の西条病院戦では先制されたものの少ないチャンスを生かし逆転、決勝にコマを進めました。

決勝戦の相手は、強打者ぞろいの熊本病院。相手投手を打ち崩すことができず拮抗した試合展開でしたが、当院自慢の機動力を生かし、2対0で初優勝を手にしました。

（総務　一木麻紀）

〈東京〉向島病院

3者初共催の高齢者向けイベント

東京都済生会、東京都、東京都住宅供給公社（JKK東京）の3者が連携し、高齢者向けのイベントを初共催しました。

当院は11月30日のイベントで、「認知症とフレイル予防」と題した講演と個別相談会を、南千住にあるJKK東京の集会所で行ないました。20人ほどの参加者は、当院の認知症認定看護師、理学療法士、管理栄養士それぞれの観点からの講演を熱心に聞いていました。また、講演後に行なわれた個別相談会には、予定時間を超えて多くの相談者が並びました。

（済生記者　加藤建志）

〈神奈川〉特養わかくさ

連携によるケアの質の向上

12月20日、褥瘡対策委員会主催の研修を実施し、多職種20人が参加しました。

テーマは「ポジショニング」。若草病院の理学療法士、木下謙介課長補佐を講師に迎え、実際に入居者さんの筋肉や身体の硬直に対する手技を教えていただきました。

木下先生が側に付いて介護士が手技を実践で行ないました。入居者さんの足や腕の可動域が広くなることへの気付きと実感があり、職員の笑みがあふれたかと思うと入居者さんも笑顔に。

当施設を含めた周辺には、横浜金沢医療福祉センターとしてさまざまな機能を持った済生会の力があります。これからも関連施設と連携を深めつつ、ケアの質の向上に努めていきます。

（施設長　清水　雅）

〈宮崎〉日向病院
制服がリニューアル

4月1日から事務職員の制服規定が見直されます。平成29年4月から着用している現行のデザインが廃番となったためで、全部署で統一されていた制服着用は患者対応部署だけとなり、その他の部署はオフィスカジュアルとなります。

制服着用部署の制服は1月にリニューアル。新制服はスクラブタイプで伸縮性に富み、動きやすく快適と好評です。見た目もスタイリッシュ。新年にふさわしいスタートとなりました。

（済生記者　村尾愛）

〈大阪〉中津特養喜久寿苑
18回目のクリスマスプレゼント

12月22日、大阪東淀ちゃやまちロータリークラブのメンバーが来苑し、恒例のクリスマスプレゼントをいただきました。

毎年この時期に入居者さんにとって必要な物品をリクエストさせていただいています。18年目を迎えた今回は「車椅子」「ポジショニングクッション」「クリスマスツリー（ユニット分）」です。

当日はクラブメンバーの皆さんに苑内を見学していただいた後、プレゼント寄贈式を行ないました。感謝状が長谷川吉則苑長からクラブの戸田和孝会長に手渡され、苑を代表して出席した入居者さん2人とともに穏やかな時間を過ごすことができました。

（生活相談員　浅田桂造）

〈大阪〉千里病院
千里メディカルラリー本番さながらの臨場感

12月2日、第20回千里メディカルラリーを関西大学高槻ミューズキャンパスで開催しました。

今回は全国から20チーム160人、スタッフ617人（うち子ども18人）と過去最多の参加者が集いました。

各チームはキャンパス内に設置された九つのステーションを回って多彩な課題にチャレンジ。例えば「秋葉原殺傷事件のオマージュ」と名付けられたステーションでは、同時多発の傷病者をいかに救命するかがテーマで、屋内プールのステーションでは、小児2人が溺れて心停止になった場面に偶然遭遇したという設定です。

本番さながらの臨場感あふれるさまざまなシチュエーションで奮闘する参加チームの姿に、ドキドキした、感動したとの声が、見学者から多くあがりました。（済生記者　秋山みゆき）

〈兵庫〉特養ふじの里
「団地カフェありの」開設10周年!!

2014年4月にUR有野団地の集会所を利用して開設した「団地カフェありの」。神戸市とネスレ日本株式会社が普及推進する介護予防カフェの第1号店でもあります。

おしゃべりを楽しむ「カフェ」と手芸を核に好きなことを共有する「手芸サロン」の2本立てで活動を続けてきました。開設から10年、昨年10月に神戸市から表彰を受け、利用者にも喜んでいただきました。

地元有野台は地域活動が盛んな町ですが、当カフェも集いの場、つながる場の一つとして高齢住民に親しまれています。

近年はコロナ禍をきっかけに、スタッフとともに密にならない交流方法を検討。団地広場を借りてのラジオ体操や、地域のマルシェへの出店など、活動の幅を広げ新たなつながりを育んでいます。

（副主任相談員　河村淳子）

特養なでしこ香川
備えあれば憂いなし

多肥地区防災訓練を11月19日、当施設駐車広場で行ないました。

当日は、地域住民や行政関係者ら約80人が参加。起震車体験訓練、非常食体験、車椅子体験などを実施し、万一の災害時に慌てないように、心と身体の準備を行ないました。

起震車体験は各々予想できた体験&反応で盛り上がりましたが、意外だったのは非常食体験と車椅子体験。ご飯と蒸しパンが想像以上においしいことや、車椅子もコツをつかんだら坂道も段差も大丈夫なことを知りました。

備えあれば憂いなし。体験することで、訓練の意図が理解でき、行動や瞬時の判断ができるようになります。

（居宅介護支援事業所　なでしこ香川　東野将彦）

〈茨城〉水戸済生会総合病院
災害時初動対応事務研修

当院事務部では令和5年度から、月2回の災害研修を開催しています。月初の1回目は災害初動時に取るべき行動について、2回目はクロノロジーの作成と広域災害救急医療情報システム（EMIS）への入力訓練を行ないます。

研修には毎月10人程度の事務職員が参加。DMAT隊員でもある高倉保用度課長が講義を担当しています。参加者からは「災害時の初期行動の大切さがよく理解できた」といった声が上がっています。

高倉課長は「事務職員は災害研修を受ける機会が少ない。災害医療のロジスティクス（業務調整）を担う病院事務職員の役割は非常に重要で、今後も研修を継続していきたい」と、事務職員の災害教育について意欲を語りました。

（済生記者　今野正俊）

〈神奈川〉横浜市南部病院

対面の市民講座再開 リレー形式で多職種が講演

12月16日、横浜市港南公会堂で、4年ぶりとなる対面形式での市民公開講座を開催しました。

開院40周年のメモリアルイヤーにふさわしく「健康寿命を延ばす」ことをテーマに、当院の医師・看護師・薬剤師等多職種が、それぞれの専門分野についてリレー形式で講演を行ないました。

当日は朝10時スタートにもかかわらず、開場時間のだいぶ前から受付に列ができる盛況ぶり。合計11講演に延べ390人が参加しました。また、会場内に設置した各種相談ブースにも約20人が立ち寄り、「ためになった」「次回もまた来たい」とのうれしい言葉をいただきました。

（済生記者　齊藤一篤）

〈栃木〉宇都宮病院

障害者のアート作品を展示

宇都宮市保健福祉部障がい福祉課主催の「わく・わくアートコンクール」入賞作品の巡回展を、12月5日から7日までの3日間、当院で開催しました。

障害者の社会参加の促進と、市民の障害福祉への理解を深めることが目的で、絵画や造形物など個性豊かな入賞作品30点を展示。当院以外にも駅や図書館、市内のショッピングモールなど8カ所に展示されました。

巡回展には外来を受診した患者さんのほか、職員や入院患者さんが多く訪れ、作品のキャプションに至るまで一つひとつ丁寧に鑑賞する人も。中には作品に感動し涙ぐむ人もいて、関心度の高さが見受けられました。

（済生記者　川原彩花）

〈福岡〉二日市病院

ホームページを全面リニューアル

1月から、当院のホームページを全面的にリニューアルしました。

イメージカラーを緑から青に変更。また、デザインとページ構成を見直し、知りたい情報・目的のページにアクセスしやすくしました。

新設したクローズアップページでは地域の皆さんに届けたい情報を写真付きでアップ。より目につきやすくなりました。また、リクルートに特化したサイトを別途制作、2月に運用開始予定です。

なお、リニューアルに伴いURLを変更しました。ブラウザのブックマークやお気に入りに登録している場合は、URLの変更をお願いします。

二日市病院ホームページ▶

（済生記者　久冨大史）

topicS

建て替え工事中の急変シミュレーション

山口総合病院

現在、当院は新病院を建築中で、現地建て替えのため旧棟を解体し新棟を建築する工程を繰り返し、令和7年末に竣工予定です。

問題は、旧棟では隣接していた集中治療部と手術部の工期が違うため、約3年間、新棟と旧棟で業務を継続すること。手術部と集中治療部間の移動距離は以前の5倍以上で、患者さんの容態によっては移送が難しい場合も想定されます。

そこで12月27日、心臓手術後患者の緊急の開胸止血術を集中治療部で行なうことを想定した「急変シミュレーション研修」を実施。医師、臨床工学技士、集中治療部と手術部の看護師など、関係部署の職員約30人が参加しました。

（集中治療部　河村恵利花、香川由美、西村佳恵）

〈山形〉はやぶさ保育園

お正月飾りを作ろう

新年を迎える前に、3歳児24人、4歳児19人、5歳児24人で、クラスごとに「だるま」や「しめ縄飾り」、「絵馬」など正月飾りの製作を行ないました。

中でも5歳児はすべて子どもたちが考え、しめ縄飾りを作り、折り紙で作ったミカンや梅の花などを付けるなど、夢中になって製作する姿が見られました。

飾りの一部には、昨年の春に自分たちで植えて育て、収穫した稲穂を使用。素敵なしめ縄飾りが完成しました。完成後は、お友だちと見せ合い、褒め合うような姿も見られ、ほほ笑ましく感じました。

しめ縄飾りは年末に持ち帰り、正月が明けて登園した子どもたちからは「おうちで飾ったよ！」などの声がありました。

（済生記者　齋藤里奈）

〈大阪〉中津病院

がん診療支援センター研修会　多職種42人が参加

第1回がん診療支援センター研修会を、12月20日に当院会議室で開催しました。

研修内容は「がん対策の目的・意義、がん患者とその家族が利用できる制度や関係機関との連携体制、当院で提供している診療・患者支援の体制について」。大阪府がん診療拠点病院の新指定要件で、自施設の診療従事者等への学ぶ機会の確保が必須となっているものです。

当日は医師、看護師、薬剤師、診療放射線技師、事務職など42人が参加。参加できなかった職員に向けては、録画を後日視聴できるようにしました。

研修会参加者へのアンケートでは「他部門での取り組みがわかった」「病院全体として頑張っていこうという意気込みを感じた」などの感想がありました。

（がん診療支援センター事務局　浦田亜紀子）

〈静岡〉川奈臨海学園

クリスマスプロレスに興奮

9回目となる川奈プロレスが12月17日、旧伊東市立川奈小学校体育館で開催され、今回も当園の子どもたち20人が観戦しました。毎年クリスマスの時期に開催されるので、今ではクリスマスプロレスという名称になりました。

試合が始まると会場は、リングアナのオッキー沖田さんのアナウンスで大いに盛り上がり、子どもたちは真剣な表情で大きな声で選手を応援しました。オッキーさんのアナウンスもあり、リングをたたいて選手を応援させてもらい、間近で試合を観戦しました。

子どもたちも職員も、熱い試合を繰り広げる選手たちからたくさんの元気と勇気をもらいました。

（施設長　竹居昭子）

大分県地域生活定着支援センター

お節介を焼きにくい時代

大分県更生保護女性連盟の広報誌の取材を12月18日に受けました。昨年8月に県内で開催された同連盟の研修会で当センターについて紹介したところ、「センターのことがもっと知りたい」という声が多く寄せられたそうです。

取材には御手洗和也センター長、筆者、圓道太一相談員が対応。当センターの業務等について説明しました。取材を受ける中で、「更生保護女性会の皆さんが熱意をもって生きづらさを抱える人を支えようとする一方で、お節介を焼きにくい時代になった」ことを語りました。

地域社会では、当センターが支援する刑余者に限らず、孤立して福祉につながりにくい人が多くいます。「お節介」は、「誰一人取り残されない社会」の実現に不可欠です。

（相談員主査　大田黒ゆき）

山口総合病院

4年ぶりの糖尿病週間院内イベント

世界糖尿病デー（11月14日）に合わせ、11月10日に糖尿病週間行事を開催しました。毎年、多職種で構成される糖尿病・腎対策チームが中心となり、院内イベントを企画しています。

今回は医師・日本糖尿病療養指導士・MSWによる医療相談、血糖・血圧測定、料理サンプルを用いた食事バランスチェック、ポスター展示などチームで考えた企画に加え、多機能型通所施設の利用者さんのパン販売も用意し、42人が来場しました。

コロナ禍の3年間はポスター展示しかできなかったので、患者さんと顔を合わせる久しぶりの開催に気持ちが高まりました。

「来年はどんな企画にしよう？」糖尿病・腎対策チームの活動は続きます。

（栄養科主任　村田千晴）

〈静岡〉伊豆医療福祉センター

松原本部理事が訪問・視察

済生会本部の松原了理事が11月24日、当施設を訪問し、現場を視察しました。

当施設は、全国の済生会で六つしかない重度心身障害児者施設で、その中でも病院から独立している最小規模の施設です。

経営的には厳しい環境ながら改善をすすめており、入所支援の他にも外来診療で発達障害の患者さんをサポートするなど、地域のニーズに幅広く対応しています。

重症心身障害児者を介護する人の高齢化問題や、医療としての発達障害の問題点など、今後当施設が地域で果たすべき役割について、渡邉誠司施設長と熱心な意見交換が行なわれました。

（事務長　貫奈秀明）

ロボット手術累計3000例に

熊本病院

12月11日、手術支援ロボットdaVinci（ダヴィンチ）での手術が累計3000例を迎えました。

当院でのロボット支援下手術は2013年に前立腺がんからスタート。保険適用の拡大を経て、現在では四つの領域（泌尿器科領域、消化器外科領域、呼吸器外科領域、心臓外科領域）で11の術式に対応しています。

ロボット・低侵襲手術センターには8人のプロクター（手術指導者）が在籍。これからロボット手術を導入する施設からの見学を受け入れる公認施設にもなっています。

より多くの患者さんに最新の低侵襲治療を提供するため、2月には地域の医療機関を対象に、導入10周年を記念したロボット支援下手術に関するフォーラムを開催する予定です。

（済生記者　東　賢剛）

静岡済生会訪問看護ステーションおしか

病の支えに木目込み細工

12月8日から26日まで、静岡済生会総合病院のギャラリーなでしこで、当事業所の利用者Tさんが制作した木目込み細工20点が展示されました。

スタッフが訪問した際に、ご本人が作りためた木目込み細工を見せていただいたことが今回の展示につながりました。

Tさんが木目込み細工を始めたのは30年前。2年前に病気になり、ほぼ寝たきりの生活になったことをきっかけに、ベッドの上でも作業できる木目込み細工を本格的に再開したそうです。

今では普通に歩けるようになったTさんの作品に「力づけられました」「美しい木目込みを見せてもらいホッと一息付けました」など、患者さんやご家族から温かなメッセージをいただきました。

（所長　山田芳枝）

topicS

エボラ患者対応を想定し感染症対策実践訓練

〈奈良〉中和病院

令和5年度感染症対策実践訓練が12月4日に行なわれました。奈良県中和保健所の主催で、当院のほか奈良県庁、奈良県立医科大学附属病院、奈良県警察本部など9団体が参加。訓練内容はエボラ出血熱感染症の患者対応で、当院の役割は感染疑い患者の診察・対応、保健所と連携し県立医大病院へとつなぐことでした。

院内感染防止対策委員会チームが中心となり、対応方法や連携の取り方、事務手続きについて訓練しました。患者はその後県立医大病院へと搬送され、約1時間の訓練が終了しました。

実際に参加した東畑恵美看護師は「とても勉強になりました。タイベック（防護具・防護服）の着脱から、患者対応、保健所との連絡方法等、学ぶことができました」との感想を述べました。

（総務課　村田みちる）

登録医総会に95人 笑顔で意見交換

〈大阪〉吹田病院

第17回登録医総会を11月25日、ホテル阪急レスパイア大阪で開催し、95人が参加しました。

第一部は島俊英院長の開催の挨拶に続いて医療連携の報告などがありました。その後一般講演として、竹中英昭副院長を座長に循環器内科・川上利香科長が「高齢心不全患者の治療と問題点」と題し、新しい心不全治療薬について詳細に解説。特別講演は、東淀川医師会の辻正純会長を座長に迎え、フリーパーソナリティの角淳一氏が「大病からの人生」をテーマに、脳梗塞や心筋梗塞を克服した後どのように年を重ねてきたのか、ユーモアたっぷりに話しました。

第二部は、岡上武名誉院長による主催者挨拶の後、意見交換会に移行。あちらこちらで笑顔が見られ、盛会裏に終えることができました。

（済生記者　橋本　茜）

病院改革は医師の働き方改革から

〈山口〉下関総合病院

日本医療マネジメント学会第22回山口県支部学術集会を11月11日、当院3階講堂で開催しました。当院での開催は13年ぶりで、対面開催により活発な意見交換が行なわれました。

当日の参加者は104人。特別講演では、香川県済生会病院の若林久男院長が「医師の働き方改革は、病院改革の入り口　すべての医療者と患者さんのために」をテーマに話しました。

シンポジウムでは「持続可能な働き方改革～山口県の未来のために～」をテーマに、熱い論議が交わされました。

（済生記者　下村桂子）

デジタル内視鏡下手術研究会

滋賀県病院

12月2日、藤山准真診療部長が当番世話人となり、「第4回デジタル内視鏡下手術研究会」を東京マリオットホテルで開催しました。

本会は、全国7施設で導入されている手術支援ロボット「センハンス」によるデジタル内視鏡下手術のさらなる発展のために開催されているもので、テーマに沿った症例発表やパネルディスカッションなどが行なわれました。

全20演題の発表があり、当院からも外科の西田龍朗副部長、荻野真平副部長、中央手術室の西村長剛看護師が発表を行ないました。

56人が参加し、デジタル内視鏡下手術への関心の高さをうかがい知る有意義な会となりました。

（済生記者　西澤真由美）

サッカーボールの寄贈

〈大阪〉中津医療福祉センター

12月13日、明治安田生命大阪中央支社の高松伸広支社長と土橋正周営業部長が大阪整肢学院を来訪し、川嶋成乃亮センター総長がサッカーボール11個の寄贈を受けました。

明治安田生命保険相互会社の「地元の元気プロジェクト」活動の一環です。同社社員の中川美保さんが中津病院の文化ボランティア委員長でもある森山明宏副院長に患者さんとして出会って以来家族ぐるみで親交を深めており、何かお礼がしたいと中川さんから申し出があったことが今回の寄贈につながりました。

ボールを受け取った子どもたちはとても笑顔で、ボールを投げたり蹴ったり楽しそうに遊んでいました。

（済生記者　鈴木亜希乃）

奈良マラソン救護班に参加

〈奈良〉訪問看護ステーション野の花

12月10日に開催された奈良マラソンに、当看護ステーションの看護師2人が救護班として参加しました。

この日は、11月中旬並みの陽気。気温15度を超える奈良みやこ路を、1万4000人のランナーが駆け抜けました。

医師・看護師・理学療法士・作業療法士・柔道整復師・AED隊・業務調整員など147人が14カ所に分かれて救護に備えました。

当看護ステーションの看護師2人が担当した第1救護所では、脱水症状や下肢のこむらかえりを起こして111人が来所。そのうち4人が救急搬送となりました。

全体として救急搬送12人という過去最高の搬送数に。各救護所対応も多く、厳しい業務となりましたが、命の危機に直面したランナーは1人も発生することなく、救護を無事終えることができました。

（所長　丸山節子）

CF達成！ 支援が彩るクリスマスツリー

〈宮崎〉日向病院

当院は、11月1日から12月25日まで実施した「MRI装置買い換えのためのCF（クラウドファンディング）」に成功し、当初目標の1000万円の2倍以上のご支援をいただきました。

地域医療の発展やこれからの当院への期待度からなるものであり、たくさんのご支援や応援メッセージに、感謝と同時に身が引き締まる思いです。

届いた応援メッセージはクリスマスツリーに飾られたオーナメントに見立てて掲示。1階待合室前の廊下に飾ったところ、行き交う人がツリーの前で足を止める姿も見られました。

（済生記者　村尾　愛）

書き初めと新年会でお祝い

〈新潟〉特養長和園

新しい年を迎え、当園では新年の行事でお祝いしました。

1月3日は書き初め。「お正月」「辰年」「ふじ」「初日の出」など、おめでたい言葉を思い思いに毛筆で書きました。楽しそうに笑顔で筆を持つ利用者さんの様子は、周りの人たちも幸せな気持ちにしてくれます。

1月12日は新年会。4年ぶりの開催で、利用者さんと職員が共同で作成した見事な辰年の貼り絵が場を盛り上げました。演奏と歌に合わせて、獅子舞踊りが始まると新年のお祝いムードが最高潮に。職員の心のこもった余興に、利用者さんから拍手が送られました。

元旦に地震がありましたが、幸い当施設に大きな被害はありませんでした。安心して過ごせる日常に感謝しつつ、これからの平安を祈って、新年会はお開きとなりました。

（済生記者　西川まゆみ）

地震・火災発生を想定した防災訓練

〈鹿児島〉川内病院

12月22日、各職員の行動が消防計画書や自衛消防隊行動要領に基づいていることを確認する目的で防災訓練を行ない、約100人が参加しました。

地震訓練では、部門ごとのチェック表をもとに点検し本部へ報告。火災訓練では状況に応じた初期消火・通報連絡・避難誘導を行ないました。

訓練中は全館放送やトランシーバーを駆使し、わかりやすく正確に情報伝達することやクロノロジーを活用した情報整理を意識し実践できました。

topicS

また、屋外では市消防局指導のもと、実際の消火器と実火を使用した消火訓練も実施。冬の寒さを吹き飛ばすように、出火発見の大声を発し、風上から風下へ向けて消火剤を噴射することで確実に消火できました。

（施設用度課　古川　大）

中国黒龍江省代表団の視察を受け入れ

〈山形〉特養ながまち荘

山形県との友好県省盟約締結30周年を記念して、中国黒龍江省の代表団が11月末に来県しました。11月28日には、代表団5人と山形県庁職員2人が当施設を視察に訪れました。

日本同様、急速な少子高齢化が進展し、介護人材の確保等さまざまな問題に直面している中国。介護保険制度の理念に基づく、自立支援介護の取り組みについて事例を紹介し、多職種連携と介護の専門性の重要性について発信したところ、日本式介護の大きな成果に大変驚いていました。

（施設長　岩崎勝也）

実際の炎を使って消防訓練

鹿児島病院

12月7日、当院3階の休憩室から出火した想定で、消防訓練を実施しました。

火災報知機の音が鳴り響く中、初期消火、消防署への連絡応答、患者さんの避難誘導など、職員は皆機敏な動きを見せていました。

その後、屋上で「消火体験装置（ファイヤートレーナー）」を使用して、実際の炎を消す訓練を行ないました。火災発生時に慌てないために、実際の炎を消火するシミュレーションが重要と考えたのです。

参加者たちは、身長ほどに燃え上がる炎に最初は腰が引けていましたが、消火器片手に果敢に立ち向かっていました。訓練後は「思ったよりも熱かった」と口々に感想を述べ、実際の大きな炎と向き合うことで感じる「熱さ」と「怖さ」を直（じか）に体験できた様子でした。

（総務課　溝添秀一）

「済生丸」をもっと知ってラッピング自販機設置

〈広島〉呉病院

当院の正面玄関右横に、11月9日、瀬戸内海巡回診療船「済生丸」支援の自動販売機を設置しました。

この自動販売機設置は、メーカーから「自動販売機に済生丸の絵柄をラッピングし、設置することで済生丸を支援したい」との提案により実現しました。

ラッピングした自動販売機を目立つ場所に設置することで、済生丸を知ってもらえたらと考えています。また、売り上げの一部は済生丸に寄付されます。

（済生記者　植田　茜）

topicS

「医療の質特別賞」受賞

〈大阪〉中津病院

12月1・2日に仙台国際センターで開催された第33回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会で、当院呼吸ケアサポートチーム（RST）の藪野雄紀臨床工学技士が医療の質特別賞を受賞しました。

当院では急性心不全などの救急患者で迅速な非侵襲的陽圧換気（NPPV）導入を要する症例が多く、COVID-19除外前からのNPPV使用が求められていました。そこで、ウイルスの曝露リスクへの対策として、閉鎖マスクと人工鼻を使用することでウイルス飛散を予防したCOVID-19専用のNPPV機器の導入を行ないました。

2020年10月～23年3月に176例（うちCOVID-19陽性15例）に使用しましたが、職員等の感染者は発生せず、治療介入の遅れを防ぐことができたことが評価されました。

（呼吸器内科副部長　東　正徳）

〈栃木〉うつのみやなでしこ保育園

心もぽかぽか焼いも会

12月12日、園児18人と園庭で焼きいも会を実施しました。

園の農園で幼児組が育てたサツマイモがこれまでで一番の豊作だったのを機に、佐藤富士江園長が「皆が育てたものを皆で食べる喜びを味わわせてあげたい」と発案し、急遽（きゅうきょ）実施が決定。「甘くておいしい」「やわらかいよ」「ちょっとこげた匂いがする」など、焼きいもを食べた園児たちが笑顔で次々と感想を話してくれました。

焼きいも会で体も心も温まり、冬らしい食育体験となりました。

（保育施設事務　福田　郁）

〈大分〉日田病院

ICLSコースを主催

当院主催のICLSコースを12月16日に日田消防署で開催し、院内外の幅広い医療関連職種のプロフェッショナル18人が参加しました。

このコースは、突然の心停止に対する初動の10分間の適切な対応と、チームによる蘇生技術の習得が目的。午前8時30分から午後5時までの長時間にわたり、参加者は実践的なトレーニングと知識の向上に精励しました。

過去には、当コースを修了した参加者が実際の診療現場で急変に遭遇し、コースで学んだ知識と技術を生かして成功裏に救命した事例も報告されています。

（システム管理室　久保田倫有）

〈山形〉特養山静寿・養護（盲）老人ホーム山静寿

できたての本場ラーメンを召し上がれ

12月6日、特養山静寿、養護（盲）老人ホーム山静寿の2施設合同でラーメンキッチンカー「花鳥風月号」を施設に呼び、入所者さん70人にできたてのラーメンを提供しました。

「花鳥風月」は、昨年10月に東京で開催されたご当地ラーメン総選挙で日本一に輝いた〝酒田のラーメン〟で、山形県酒田市に本店をかまえる人気店です。

コロナ禍以降、外食ができない状況が続いていた入所者の皆さんに、できたての本場ラーメンを食べていただきたい！との思いから、この行事を企画。

皆さんからは「できたては美味（おい）しいなぁ」「また食べたい！」などの喜びの言葉が上がり、スープまで飲み干した人もたくさんいました。久しぶりの本格的なラーメン店の味に満足していただけたようです。

（済生記者　丹　秀樹）

〈大阪〉野江特養城東園

消防避難・水害避難訓練

消防避難訓練と水害避難訓練を11月16日に行ない、職員10人が参加しました。

消防避難訓練では、2階リネン室からの出火を想定。まずは火元の確認。大声で「火事です！」と叫び、素早く消火器・屋内消火栓を用いて初期消火するも鎮火できず、各階の入所者さんを居室バルコニーへ避難誘導して終了しました。

水害避難訓練では、大雨で淀川氾濫危険情報「警戒レベル3・高齢者等避難」が発令されたことを想定。危険情報発令を園長へ報告し、階段を使用して入所者さんを3階食堂へ避難誘導しました。

歩行不能な車椅子の入所者さんは、車椅子を職員が持ち上げ、無事3階食堂まで避難誘導しました。けたたましく鳴るサイレンに慌てることもなく、入所者さんは無事に避難、またケガもなく安全に避難訓練を終了しました。

（事務長　川留章義）

〈新潟〉なでしこ青空保育園

鮭の遡上を見学

11月21日、鮭の遡上（そじょう）を見るため、5歳児17人を連れて近くの五十嵐川へ。五十嵐川漁業協同組合の方から、鮭が自分の生まれた川に戻ること、産卵をすること、オスとメスの見分け方など、詳しく教えていただきました。

実際に鮭を捕まえているところを見学し、「大きいね！」「バタバタ動いて元気だね！」など、本物の鮭を目の前にして大興奮の子どもたち。

その後は鮭に触らせてもらい、鮭と一緒に記念撮影をしました。「すごい！」「ヌルヌルしてるよ！」。どの子も興味津々で鮭に触れ、楽しい時間を過ごしました。

体中傷だらけになりながら必死に生まれた川へと戻り、産卵をする鮭の一生を知ることができ、子どもたちにとって貴重な経験となりました。

（済生記者　宮原美咲）

topicS

静岡済生会総合病院
保育園でラグビー体験

12月19日、当院の共同利用型院内保育所「なでしこ保育園」に、ラグビーチームの静岡ブルーレヴズ（旧ヤマハ発動機ジュビロ）のコーチ2人が訪れ、年中・年長クラスの園児13人を対象にラグビー体験を行ないました。

園児たちもはじめは緊張した面持ちでしたが、体を動かし始めるとニコニコ顔ではしゃぎ出し、扱いの難しいボールをキャッチしたり転がしたりして、初めて持つボールの感触を楽しみました。

体験を終えた園児たちは、「楽しかったよ」「また来てくれるかな」などと口々に話していました。最後にラグビーボールをプレゼントされ喜ぶ子どもたち。ラグビーブームはしばらく続きそうです。

（企画広報課　滝田恭子）

〈兵庫〉特養ふじの里・小規模特養なでしこ神戸
恒例の5Sウィーク

12月4～8日、ふじの里・なでしこ神戸では恒例行事となった「5Sウィーク」を開催しました。

5S活動（現場の環境維持や業務効率改善のための取り組み）を各部署で発表する1年に1回のイベントで、テーマは「5Sに触れる」。11部署（全12部署中）の5Sに関する取り組みを掲示にて発表し、業務の体験ブースも設置しました。

目玉企画の〝皆で選ぼう改善提案NO1〟で、66人の投票から選ばれたのはデイサービスの「入浴タオルの改善」でした。

リネン交換、おむつ交換、電話、来客、訪問と日頃の業務を5Sにちなんで審査した結果で、参加した職員からは「緊張した」「学びの場となってよかった」というコメントがありました。

（複合課長代理　池内茂雄）

〈神奈川〉横浜市東部病院
脳卒中リハビリ体験を作品に込めて

12月4～15日、「鳥獣りは」作品展を当院3階多目的ホール前ギャラリーで開催しました。「鳥獣りは」とは、脳卒中のリハビリ体験を鳥獣に仮託して描いた作品のこと。12月10日の市民公開講座（P42参照）と連動した企画です。

「鳥獣りは」の作者は、講座の対談で登壇予定の村越正明さん。村越さんは2015年に脳卒中を発症し、リハビリ入院中に画作を開始しました。

作品自体のユーモアもさることながら、病気になっても新たな世界を切り拓くことができると感じさせてくれる素晴らしい展示でした。

（済生記者　荒木愛美）

村越さん夫妻

〈埼玉〉川口総合病院
臨床検査技師の国際交流

11月24日から10日間、JICA（独立行政法人国際協力機構）の海外研修生を受け入れました。

研修生は、ギニア共和国の国立公衆衛生研究所に所属するバリー・フサイナトウーさん。小澤桃技師のもと、細菌検査室でグラム染色や培養・同定・感受性検査、PCR検査などの研修に意欲的に取り組みました。

「もも（小澤技師）は素晴らしい先生。日本人は本当に親切な人ばかりで私はとても幸せです」とバリーさん。

講師を務めた小澤技師は「わからないことを確実に理解できるまで、何度も質問をしてくれる姿が印象的でした。休憩時は写真を一緒に撮ったり、ギニアでの生活を教えてもらったりと、非常に楽しい時間を過ごしました」と感想を話しました。

（臨床検査科　荻野毅史）

熊本病院
働き方改革に準じた幹部研修

12月14日、120人を超える各職能の役職者を対象に、幹部研修会を開催しました。例年、土曜日に院内で開催していましたが、働き方改革を念頭に今回初めて平日日中に、かつ院外研修施設で開催しました。

研修テーマは、当院の診療の柱である「外来」「救急」「入院」の三つ。はじめに院長、副院長をはじめとした経営層から当院を取り巻く環境や医療情勢の変化、テーマごとの課題など現状認識と問題提起のプレゼンが行なわれました。その後、各テーマ2チームずつに分かれ、グループ内で今後の方針や戦略について討議を進めました。

参加者からは「日常業務と離れることで討議に集中できた」「診療に直結する喫緊のテーマであり、課題整理ができた」などの声が多く寄せられました。

（済生記者　東　賢剛）

〈東京〉中央病院
東京タワーで試作販売会

戸板女子短期大学の学生さんたちが考案した「ハニーチーズスコーン」の試作販売会を、12月20日、東京タワーフットタウン2階で開催しました。

今回の試作品は、港区芝地区産のはちみつ「しばみつ®」を使用したお菓子を、当院「みんなとプロジェクト」と同短大生（8人）が共同開発したもの。

チーズがゴロゴロと入ったスコーンに、しばみつをたっぷりかけていただくハニーチーズスコーン80個、一緒に販売したしばみつマドレーヌ100個も完売するなど、予想以上の売れ行きでした。

海外からの観光客も多い中、参加した学生さんたちは英語のチラシを用意するなど工夫しながら接客を行なっていました。

（済生記者　鈴木香純）

熊本福祉センター

カラオケ大会で忘年会

11月26日、グループホームのうちだ1番館（あおぞら・わかば）と2番館に入所している利用者さんを対象に忘年会を開催しました。参加者は利用者さん30人、職員13人の計43人です。

当日は世話人さんが朝早くから仕込んでくれた「だご汁」やサツマイモの甘味、おにぎりなどを食べながら、カラオケ大会を実施しました。皆さん自分の好きな曲を自由に歌い、他の人が歌うときは手拍子をして応援するなど、大いに盛り上がりました。

最後に、一人ひとりに気持ちのこもった手作りのお菓子を配って終了。和やかな雰囲気の中、笑顔あふれるひとときを皆で楽しく過ごすことができました。

（グループホーム　支援員　山下賢一）

〈滋賀〉特養淡海荘

ふれあい祭りで地域貢献

当荘が取り組んでいる地域貢献事業の一環で、コミュニティセンターで行なわれた「ふれあい祭り」（葉山学区10月22日、葉山東学区11月5日）に参加しました。

コロナ禍を経て久しぶりの開催。晴天にも恵まれ、両日とも1000人を超える地域住民でにぎわいました。

当荘のブースでは、介護相談や福祉用具の体験利用を実施。子どもたちにも来てもらえるよう射的の出店も行ない、常に行列ができるほどの大盛況となりました。

（介護支援専門員　宮下達也）

〈福岡〉大牟田病院

救命救急講習会 実践さながらの緊迫感

院内看護師を対象に「第2回救命救急講習会in OMUTA」を11月10日に開催し、10人が参加しました。

今回は応用コース「心肺停止の蘇生手順」「チーム蘇生をマネジメントする」。それぞれの役割分担の確認から、チームとして取り組む重要性、また臨床を想定したさまざまな患者設定の中で、より実践的な手順確認を行ないました。

また、急変後心停止に至った患者さんへBLS（一次救命措置）を行ないながら救命処置を進め、ICLS（10分間の適切なチーム蘇生）演習を実施。

実際に起こりうる状況を設定し、チームリーダーを中心とした医療の実践に向けてメンバーはチームの一員として、声を出し合うなど実践さながらの緊迫した雰囲気で行なわれました。

（外来看護師　徳田　愛）

愛媛日産自動車から車椅子寄贈

〈愛媛〉松山特養

1月11日、県社会福祉協議会「愛媛まごころ銀行」を介して、愛媛日産自動車株式会社の岡豊代表取締役から県内10カ所の福祉施設に多機能型車椅子のご寄付がありました。寄贈先施設を代表し、山崎準平施設長が贈呈式に出席しました。

愛媛県の高齢化率は全国平均29・0％に対し33・45％と高く、入居者さんの中には足腰の不自由を抱える人も多くみられます。今回の寄贈により、入居者さんの行動範囲を広げ心身の安定・活性化につなげるためのアイテムが一つ増えました。

さらに、職員の身体的負担の軽減にもつながるなど、介護の質の向上（安心・安全な支援）も期待できます。

（事務　夏井理恵）

〈鳥取〉境港総合病院

情報も悩みも共有できる交流の場に

透析患者交流会を11月30日に当院会議室で開催し、患者さんとご家族計33人が参加しました。平成23年度から毎年1回開催してきましたがコロナ禍で中断、今回は4年ぶりの開催となりました。

当日は、スイーツや紅茶を提供し茶話会のような雰囲気の中、腎臓内科の井山拓治医師が「水分調節の必要性」について講演。その後「私の楽しみなこと」をテーマに座談会を行ないました。

参加者からは「次回も参加したい」「年2回開催してほしい」「看護師さんの優しい心遣いが大変うれしかった」「普段話さない人と会話ができてよかった」などの声がありました。

話すことで情報交換ができ、悩みも共有できる有意義な交流会となりました。

（済生記者　亀尾美子）

4施設合同で災害訓練

大阪整肢学院

当院では隣接する支援学校、障害児入所施設、保育園と災害時避難協定を締結し、4施設で協力して災害に備えています。12月6日、教育委員会から派遣された防災アドバイザーの指導のもと、当院と隣接する中津支援学校で地震・津波避難訓練を実施しました。

訓練後には防災学習も実施。防災クイズやダンゴムシポーズの動画視聴、管轄警察署の方からも話を伺うことができました。職員と子どもたちは真剣な表情で聞き、防災に関する理解を深める機会となりました。

訓練には約400人の子どもたちが参加。管轄警察署の協力もあり、安全に避難訓練を終えることができました。

（看護長　白沢由美子）

topicS

神奈川県病院
柚子のモイストポプリ作り

冬至を迎えるイベントとして、12月21日に柚子を使ったモイストポプリ作りを地域包括ケア病棟で行ないました。

刻んだ柚子（ゆず）の皮をカップに入れ、塩の層を作ったらまた柚子の皮を入れる、という作業を何回か繰り返し、カップがいっぱいになったら柚子の絞り汁をかけて完成です。

参加した約10人の入院患者さんからは「柚子の香りは大好きで、とても安らぐ」「枕元に置いておいたらぐっすり眠れそう」といった声が上がりました。

デイルームいっぱいに広がった心地よい柚子の香りに包まれながら、冬至のひと時を楽しむことができました。

（済生記者　小山友輝）

長野保育園
新春レッドカーペット？

1月11日、遊戯室で「子ども新年会」を行ない、85人の子どもたちが参加しました。

干支やお正月伝統遊びをクイズ形式で紹介したり、先生たちによる羽子板対戦を行なったりした後は「新春レッドカーペット」。計8組の園児と先生たちが、得意技や楽しい芸を披露しました。

トップバッターは、就任1年目の先生二人。「幸せなら手をたたこう」の歌とピアノに合わせて、それぞれ縄跳び技と皿回しを披露しました。続いて年中のお友だちが、かわいい獅子舞をして、他の園児たちの頭を噛（か）むまねをするなど、お正月らしい雰囲気で会場を盛り上げてくれました。

最後は園長先生。40年以上前から保育園にある貴重な人形を使い、腹話術を披露してくれました。腹話術の人形を見て、珍しがったり、少し怖がったりする園児たちの様子もみられました。

（済生記者　海野　京）

〈福岡〉二日市病院
4年ぶり 顔を合わせて交流

第4回ゆまちネットフォーラムを11月29日、大丸別荘で約4年ぶりに開催し、計106人（院内47人・院外59人）が参加しました。

このフォーラムは、地域基幹病院、地域医療支援病院である当院が、地域の医療関係の先生方との連携をより深めるため平成30年から開催してきたもの。

当日は、「ロボット手術の導入について」「救急ワークステーションの取り組みとHCU増床について」「整形外科の診療について」「地域医療連携報告」の4題について発表が行なわれました。

講演会終了後の懇親会では、普段は電話や文章でのやり取りが多い地域医療機関の皆さんと直接顔を合わせての交流ができ、貴重な場となりました。

（済生記者　久冨大史）

受審に向けて総力戦 病院機能評価一発合格

〈大阪〉千里病院

7月6・7日の2日間、日本医療機能評価機構による病院機能評価を受審し、11月10日付で見事一発合格を果たしました。

S評価一つを含むA評価の取得率は91％と、高得点をマーク。初回認定は2008年6月16日、今回で4回目の認定になります。品質管理室を中心に、受審に向けて病院が一丸となり「総力戦」で臨んだ結果です。

評価項目に新設された「カルテビュー（カルテの記載から診療・ケアの質を確認するもの）」に対応するため、中谷敏院長を隊長として品質管理室・医事課・病歴管理室の約7人で結成した「キャラバン隊」が各診療科をキャラバンしたことも、好結果につながりました。

（済生記者　秋山みゆき）

福井県済生会病院
すてきな帽子をかぶって 外出の楽しみを

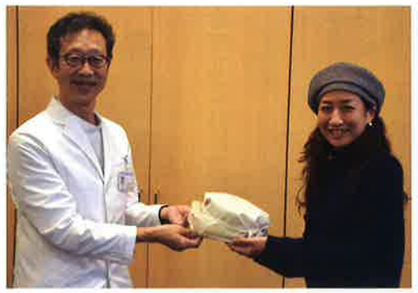
12月1日、がん患者支援に携わる佐藤麻季子さんから、脱毛に悩むがん患者さんのために、今までにないすてきな帽子を36個寄贈していただきました。

従来の医療用帽子とは異なり、ファッショナブルかつ機能的なデザインで、闘病中の方が明るい気分で過ごせる工夫が凝らされています。自宅や外出時に活用でき、デザインはリボンを取り外し、前後に結ぶことで調整可能。また、リボンは視線誘導にも寄与し、髪の毛量が少なくなっても気にせず快適に着用できます。

この特別な帽子には、自身もがん患者である帽子会社社長の熱い思いがあります。

帽子を受け取った人は「外出の楽しみが増えました」とうれしそうに話しました。

（済生記者　田中一弥）



鹿児島病院
地域交流の場が復活

新型コロナが5類感染症に移行後、地域で活動できる場が復活し、当院職員も頑張っています。

10月2日の高齢者自主グループへのフットケア講習では、参加者から「私の足どう？」と、講師の松永美保看護師が引っ張りだこに。

町内会踊り連と参加した11月3日の「おはら祭」では、職員参加で活気が出たと喜ばれました。

11月18日の県手話通訳士協会主催の聴覚障害者向け認知症学習会では、講師の黒野明日嗣医師への質問が途切れず、認知症への関心の高さが伺えました。

11月26日の地域文化祭では、11人の職員が血圧測定・手洗い体験などの啓発活動を行ないました。

今後学びたいテーマに、予防医学や介護技術をあげる声も多数ありました。

（済生記者　竹中康代）

topicS

静岡済生会総合病院
キッチンカー「お米丸」がやって来た！

12月6日、当院が運営するなでしこ保育園に、本格的石窯を積んだキッチンカー「お米丸」号がやって来ました。

お米丸は、株式会社魚国総本社が運営するフードトラック。食育活動や米の普及のため全国の福祉施設、こども園や保育園などを巡回しており、当園への訪問は7年ぶり2度目です。

午前中はお米の大切さやおいしさを伝える紙芝居を披露していただき、午後はキッチンカーで調理した焼きたてのピザが園児約50人に提供されました。

石窯でピザを焼き始めると、いい匂いに誘われ園児たちはお米丸号の周りに集合。米粉でできたピザを「おいしい！」「このビーマンは食べられる」などと味わいながら皆でおいしくいただきました。

（済生記者　酒井あい）

〈熊本〉しらふじ子ども園
しらふじFunDay!!

当園では「しらふじFun day!!」を10月27日に開催し、178人の子どもたちが参加しました。

以前は保護者と職員で食品バザーやゲームコーナーを作り秋祭りを開催していましたが、コロナ禍で中止に。子どもたちと職員とで何か楽しいことはできないか?と考え企画した新イベントです。

当日は「遊ぼう！食べよう！楽しもう！」をスローガンに、職員が考えたゲームコーナー（ヨーヨー釣り、わなげ、おばけのボール当てなど7～8種類）で遊びました。

お昼は、子どもたちが皮むきや切り込みを手伝ったカレーライス。おやつは、職員が手作りした綿菓子と給食の先生手作りのコロコロドーナツでした。

（主幹保育教諭　住岡直美）

愛知県済生会リハビリテーション病院
なでしこCafé、開店！

摂食嚥下支援チームが企画し、12月19～20と21～22日、クリスマス前のイベントとして病棟に「なでしこCafé（カフェ）」を開店しました。

病院で提供する食事だけでなく、楽しくタンパク摂取ができないかと考え、カフェではプロテインを付加したホットドリンクを提供することに。また、職員がサンタやトナカイに扮したり、クリスマスの音楽を流したりしてクリスマスムードを演出しました。

カフェに参加した患者さんは延べ250人ほど。リハビリ後、患者さんに好きな飲み物を選んでもらうと、普段はなかなか飲めないコーヒーや甘い飲み物に、患者さんが笑顔になる瞬間をたくさん見ることができました。また、嚥下訓練中の患者さんからも、訓練とは違う飲み物を口にして「おいしい！」という言葉が出ました。

（看護師長　水越朋代）

フライングディスクでメダル獲得
静岡医療福祉センター成人部

第24回静岡県障害者スポーツ大会「わかふじスポーツ大会」が11月26日、近隣の草薙総合運動場で開催され、フライングディスク競技に利用者さん5人が参加しました。

大会規定の変更で、これまで参加していた種目の「アキュラシー3メートル」が廃止となり、全員が「5メートル」に挑戦することに。的までの距離が長くなったことで競技の難易度が上がりました。

しかし日々の練習に加え、大会直前に静岡県障害者スポーツ協会の指導員に競技指導を受けたこともあり、4人が各グループ内で3位までに入りメダルを獲得。施設に戻った後、職員に笑顔で競技の様子を話しながら、誇らしげにメダルを見せていました。

（済生記者　小林慈倫）

〈愛媛〉松山特養
手作りカレンダーのプレゼント

12月22日、松山西中等教育学校の生徒さん6人の訪問を4年ぶりに受けました。

同校とは毎年クリスマスの時期に交流があり、吹奏楽の演奏やダンスの披露、プレゼントなどで楽しませてもらっていました。

今回は感染予防対策のためプレゼントのみとなりましたが、手作りのすてきなカレンダーをいただき、入居者さんも職員も新年を迎える準備ができました。

（済生記者　畑中利恵）

〈山形〉小白川ケアセンター
〝山形の休日〟

サービス付き高齢者向け住宅小白川で、11月29日に映画観賞会を行ないました。

利用者の皆さんに事前に好きな映画を聞くと「チャップリンや高倉健、オードリー・ヘプバーンが出ている映画をよく見たねえ」との声があがりました。それらの俳優の出演作やその他いくつかの中から投票で選ばれたのは「ローマの休日」です。

当日は12人が参加し、2時間の長丁場でしたが集中して観賞しました。観賞後には「とても良かった」「久しぶりに観られて良かった」などの感想があり、余韻に浸りながら、甘いおやつをおともに優雅な時間を過ごしました。

（済生記者　岩城多香代）

クリスマスの配膳係はサンタさん

〈栃木〉宇都宮病院

当院の医療栄養科では、病気に負けないで頑張る患者さんに笑顔になってもらおうと、クリスマスの日の配膳に趣向を凝らしています。

今回は、岡本憲一医療栄養科長、秋山靖紀調理課長、管理栄養士の松本優さん、山川小百合さん、高橋歩夢さんの5人がサンタクロースやトナカイに扮し、12月25日の小児病棟と緩和ケア病棟への配膳時に、患者さん55人にクリスマスプレゼントを手渡しました。

プレゼントは、お菓子が入ったクリスマスブーツとバルーンアート。受け取って「ありがとう」と笑顔を浮かべる子どもたちや、「何十年ぶりにクリスマスプレゼントをもらえてうれしい」と喜ぶ患者さんの姿が印象的でした。

（済生記者　川原彩花）

サンタさん、ありがとう

〈千葉〉習志野病院

いずみ保育園（院内保育園）で12月20日、クリスマス会を開催しました。

当日は園児17人が参加。「きらきら星」の音楽に合わせた鈴の演奏や「バナナクン体操」で体を動かした後、皆で「サンタさ～ん」と呼びかけました。

すると、大きな袋をかついだサンタさんが手を振りながら登場。園児たちはびっくりしたり、喜んだり、怖がったり。サンタさんから一人ずつ名前を呼ばれ、プレゼントを受け取って一緒に写真撮影をしました。

その後、サンタさんと病院職員にも、園児からお礼のメッセージカードが手渡されました。

（総務課　石塚光子）

プレゼントで寒い冬も温かく

〈愛媛〉西条特養

12月23日、一足早いクリスマス会をユニットで行ない、9人の入居者さんが参加しました。

まずは、スノードーム作り。サンタクロースやトナカイなどのマスコットの中からお気に入りの一品を選び、土台に貼り付けて固定。そこに透明のカップをかぶせて完成です。「きれいにできた」「一緒に写真を撮って」など、皆さん大満足でした。

そこへ、待ちに待ったサンタクロースが登場。一人ひとりプレゼントを受け取り、一緒に記念撮影をしたり、職員が練習したマジックを披露したりして、楽しいひとときを過ごしました。

プレゼントの中身は手袋や靴下など。寒い冬も温かく過ごせそうです。

（介護支援専門員　大藪智子）

topicS

ホットなメリークリスマス！

〈福岡〉特養むさし苑

12月22日、当苑近くの保育所の園児たちからクリスマスプレゼントをもらいました。

0～3歳の園児たちが一つひとつ手作りしたお花やメッセージカードには、日々の成長が感じられる手形が。一生懸命取り組んできたことが伝わってきました。

また、園児たちが歌ったクリスマスソングのCDには一生懸命歌う園児たちの純真さと明るさがあふれていて、聞くだけで自然と笑顔になりました。

「皆さんに笑顔を届けることができて、園児たちも喜んでいると思います」と川邉みお園長。入居者さんやデイサービスの利用者さん、職員たちにとって、心が温まるホットなクリスマスになりました。

（済生記者　岸川涼二）

クリスマスの音色が響く

静岡済生会総合病院

当院外来フロアで12月16日、クリスマスコンサートを開催しました。

このコンサートは患者さんとその家族、地域の人々にクリスマスを楽しんでもらうため、患者サービス委員会が企画。

病院スタッフで結成された〝Dr. Children〟のバンド演奏、常葉大学短期大学部音楽科の学生さんによる木管楽器の演奏、県立清水南高校中等部の学生さんによるダンスパフォーマンスが披露されました。

150人を超える観客が集まり、皆さんリズムに合わせて手拍子をしたり、配られた歌詞カードを見ながら歌を口ずさんだりと、楽しいひとときを過ごすことができました。

（済生記者　酒井あい）

クリスマスの楽しさで瞳がキラキラ

〈福井〉特養聖和園

クリスマス会を12月23日に開催し、入居者さん50人と職員12人が参加しました。

職員のフルート演奏で幕開け。手拍子をする人、一緒に歌ってくれる人も多く、サンタやトナカイに扮した職員が登場すると一層大きな拍手が鳴り響きました。

ハンドベルのきれいな音色と楽しげなクリスマスの雰囲気に包まれる皆さんの瞳はキラキラと輝いているようで、こうした非日常の特別なイベントの持つ力を改めて感じました。

（済生記者　野尻　宗）

患者さん全員に手作りのクリスマスカード

神奈川県病院

12月25日、当院・長島敦院長をはじめ、職員と看護学生ら25人がサンタとトナカイに扮し、入院患者約160人全員にクリスマスカードを配りました。

カードはすべて職員の手作り。手描きの絵やシールできれいに装飾されたもの、飛び出す絵本のように立体的な作りのものもあります。

突然のサンタ一行の来訪に、笑顔で手を振ってくれる人や、照れながらカードを受け取る人も。予想外のクリスマスイベントに、「ありがとう」と涙ぐみながら喜んでくれた患者さんもいました。

（済生記者　小山友輝）

topicS

〈奈良〉御所病院
笑顔あふれるクリスマス会

12月21日、入院患者さんに向けたクリスマス会を4年ぶりに開催しました。

看護部とリハビリテーション科が主体となりイベントを企画。当日は中山正一郎院長扮するサンタクロースが各病室を訪れ、「メリークリスマス」と声をかけながら患者さん一人ひとりにクリスマスカードを手渡しました。

その後は会場を移し、お楽しみの出し物タイム。ハンドベル演奏、イリュージョン、マツケンサンバショー……職員たち渾身の発表で盛り上がり、最後は患者さんも一緒に皆で脳トレ合唱を行ないました。

30人ほどの患者さんが参加し、楽しいひとときを共に過ごすことができました。

（看護管理室　副看護部長　永井由紀）

大阪整肢学院
大きな大きなサンタさん

12月20日、サンタクロースが一足先に当院の約80人の子どもたちに会いに来てくれました。

のっしのっしと歩く、今まで見たこともないぐらい大きなサンタクロースの登場に、少し驚きながらもにっこり笑顔の子もいれば、びっくりして泣いてしまう子も。それでも子どもたちは皆目を輝かせながら、少し不思議そうにサンタさんからプレゼントを受け取っていました。

（事務係長　長谷川文崇）

〈大阪〉障害者支援施設ふくろうの杜
大盛り上がりのクリスマス会

12月17日に生活支援一課（入所）が、21日に二課（通所生活介護）がクリスマス会を行ないました。

17日は、入所者さん30人がゲームと職員によるDJブースで大盛り上がり。また、イオン大阪ドームシティ店さんからクリスマスプレゼントを届けていただきました。2014年から欠かさず来ていただいており、一同感謝と同時に大喜びです。

21日も、利用者さん39人がゲームや出し物で大いに盛り上がり、次の日の話題もクリスマス会で持ちきりでした。

（生活支援一課　角谷愛里）

和歌山病院
風船バレー、合唱、そして笑顔

12月22日、回復期リハ病棟の患者さんを対象に、リハビリテーション科主催のクリスマス会を初めて開催しました。

はじめに、風船バレーのレクリエーションを参加者全員で実施。その後、スタッフがギターとエレクトーンを演奏し、クリスマスソングを含む4曲を患者さんと一緒に合唱しました。

参加した患者さんからは「風船バレーが楽しかった」「歌が懐かしくて感動しました。これからは春夏秋冬、季節に合わせてイベントを定期的に開催してほしい」と、多くの反響がありました。

短い時間ではありましたが、総勢23人の患者さんが参加し、たくさんの笑顔に出会うことができました。

（済生記者　松元靖寿）

静岡市桜の園
おなかも心も大満足！

当園のクリスマス会を12月15日に開催し、入居者さん49人とショートステイ利用者さん1人が参加しました。

サンタやトナカイに扮した職員がハンドベル演奏や「きつねダンス」を披露したり、YOASOBIの大ヒット曲「アイドル」に合わせて踊ったり、皆さんと一緒に楽しい時間を過ごしました。

また、この日のクリスマスメニューは実行委員会からのリクエストに応え、調理師さんが腕を振るってくれました。午後にはクリスマスケーキを食べ、おなかも心も大満足の一日でした。

（済生記者　原　史乃）

〈福岡〉飯塚嘉穂病院
2病棟でクリスマス演奏会

クリスマス演奏会を12月18日に緩和ケア病棟で、22日に回復期リハ病棟で開催しました。

緩和ケア病棟では4年ぶりの対面での開催で、患者さんと家族約20人が参加。多職種で構成される院内音楽バンド「K's Music Club」がクリスマスソングなど5曲を演奏し、病棟看護師がハンドベル演奏を披露しました。最後に、トナカイとサンタに扮した亀山敏文医師と福田篤志医師が患者さん一人ひとりにプレゼントを渡しました。

回復期リハ病棟では患者さん約30人が参加。「K's Music Club」が7曲を演奏、そのうち「涙そうそう」と「ふるさと」の2曲で患者さんがコーラスで共演し、美しい歌声を響かせました。

（済生記者　松岡亜希）

〈神奈川〉若草病院
「メリークリスマイル！」

12月19日、わかくさ保育園の園児10人が当院の事務所にやって来ました。

「日ごろの感謝を伝えたい」という赤間久美子園長とともに、赤いサンタの帽子をかぶったかわいらしい園児たちが「メリークリスマイル！」と元気な声でごあいさつ。森眞寿副院長が代表してあいさつを受けました。

「メリークリスマイル」とは、皆が笑顔になって幸せを呼び込めるようにと願い赤間園長が考案したフレーズです。

普段は仕事の効率を重視している事務部職員ですが、元気でかわいい園児たちの訪れに、仕事の手を止め、ほっこりとした気持ちになりました。

（済生記者　髙木裕子）

topicS

〈大分〉日田病院
5人の小さなサンタさん

最強寒波に見舞われ雪の舞う12月22日、当院託児所から5人の小さなサンタさんが遊びに来てくれました。

子どもたちは患者さんや保護者、職員の前で、クリスマスソングに合わせリングベルを披露。その一生懸命な姿に、患者さんも一緒に手を叩いて応援していました。

そんな子どもたちにもクリスマスのサプライズが。大坪仁副院長がサンタクロースに扮し登場すると、「わぁ～」と喜ぶ子、びっくりして泣いてしまう子も……。

大きいサンタさんからプレゼントをもらった小さなサンタさんたちは、うれしそうに託児所に帰っていきました。

（済生記者　石井　玲）

〈愛媛〉今治病院
4年ぶりのコンサート

緩和ケア病棟のクリスマス会を12月22日に行ない、患者さんとその家族約15人が参加しました。

クリスマスコンサートの開催は4年ぶりです。当院の河田恵美看護師が所属する「フェニックスサキソフォンクワァルテット」の皆さんが、クリスマソングや東京ブギウギなどを演奏。患者さんも手拍子をして楽しんでいる様子でした。

終演後は、サンタクロースとトナカイに変装した三好明文医師と長山幸仁看護師が患者さんにクリスマスケーキとカードをお届けしました。

（済生記者　日野美華）

〈兵庫〉特養ふじの里
連日、クリスマス忘年会

ふじの里デイサービスセンターでは、12月14日から20日まで連日、20人前後の利用者さんとクリスマス忘年会を開いて令和5年を締めくくりました。

お楽しみはビンゴゲーム、職員の出し物、ポンポンを使った体操、そして15時のおやつ。

デイサービスの職員は芸達者が多く、利用者さんもまた盛り上げ上手で、笑いの絶えないイベントになりました。おやつのケーキ盛り合わせも好評で、利用者さんから「おやつをこんなにたくさん食べたことがない、おいしいね」と言われました。

（済生記者　山下芳樹）

〈山形〉特養やまのべ荘
毎年恒例！　クリスマスに染まる1週間

当荘デイサービスでは12月18日からの1週間、毎年恒例のクリスマス行事を開催。約30人の利用者さんが参加し連日、職員サンタやトナカイのハンドベル隊が日替わりでいろいろな芸を披露。ハンドベル隊のクリスマスソング演奏は練習なしのぶっつけ本番のため音程がよく外れ、そのたびに利用者さんが温かい声援を送っていました。

また、サンタがプレゼントを配ると「ありがとさまなぁ～こだな良いものもらって」と喜んでくれました。おやつは一足早いクリスマスケーキで、ほとんどの人が完食しました。

（デイサービス　藁科留美）

〈宮崎〉日向病院
二人羽織で楽しい年の瀬

12月20日、回復期リハビリテーション病棟でレクリエーションを行ないました。クリスマス前ということもあり、参加した約30人の患者さん・スタッフはサンタの帽子をかぶるなど、皆クリスマスモードに着飾りました。

この日はまずスタッフと一緒に、玉入れなど少し体を使ったゲームでウオームアップ。次に、二人一組になって「二人羽織」をしました。

〝お約束〟通り、患者さんの声かけで目隠しスタッフがメイクアップに挑戦。「そこを大きく丸く書いて～ぐるぐる書いて」などハチャメチャな指示が飛び、スタッフの顔は大胆な仕上がりに……。皆で大笑いし、楽しい年の瀬となりました。

（済生記者　村尾　愛）

静岡済生会看護専門学校
ハンドベルと手作りカード

当校の学生102人が12月20日、静岡済生会総合病院に「クリスマス訪問」を行ないました。コロナ禍で見合わせていたため、4年ぶりの実施となりました。

学生たちは各病棟を訪問し、心を込めてハンドベルの演奏をし、手作りのカードをプレゼントしました。患者さんは思いがけないプレゼントに喜び、つかの間ではありましたが幸せな気分を共有しました。

ある70代の入院女性は「すてきなカードですね。うれしいです」と褒めてくださいました。学生もまた「来年もぜひ訪問をしたい」とうれしそうでした。

（教務科　大畑浩美）

〈石川〉金沢病院
「SKE7」始動！　大成功の初コンサート

済生会金沢アンサンブル（SKE）による初のクリスマスコンサートを、12月25日、当院エントランスホールで開催しました。

医師、看護師、薬剤師、事務、警備など当院職員7人で結成したSKE。2カ月前から、業務後や週末の時間を使って日々練習に励んできました。

当日、サンタコスチュームに身を包んだメンバーは、サックス、フルート、トランペットなどで「見上げてごらん夜の星を」「きよしこの夜」「あわてんぼうのサンタクロース」など5曲を演奏。集まった患者さんから大きな拍手をいただきました。

（総務課　中島菜七）

〈福井〉特養聖和園
ミニおせちと金杯で乾杯！

1月4日から3日間、当施設デイサービスで新年会を開催し、延べ94人の利用者さんが参加しました。

お正月らしく職員は華やかな着物を身にまとい、この日のために直営厨房で心を込めて作った特製ミニおせちと豪華な金杯で、皆さんと一緒に新年のお祝いをしました。

その後は、男性職員が「一世風靡セピア」のパフォーマンス、二人羽織、女性職員が「さくらさくら」の舞踊などを披露。拍手や歓声、大笑いが各テーブルから巻き起こり、お正月ならではの特別な時間となりました。

会の終わりに皆さんにお手製のおみくじを引いていただき、見事大吉を引いた人には豪華景品（!?）をプレゼントしました。

（済生記者　野尻　宗）

福井県済生会病院
心も温まる手編み帽子の寄贈

11月29日、「がんの子どもを守る会」の坪田起久恵さんを中心とする大野公民館の皆さんから、愛情たっぷりに編まれた毛糸帽子など51個の寄贈がありました。

寄贈を受けた集学的がん診療センターの細川清子看護師は「このような寄付はただ寒さをしのぐだけでなく、温かい思いを感じることができ、励ましになります」とコメント。

寄贈された帽子は、さまざまな患者さんたちに配られ、笑顔と暖かさをもたらしています。坪田さんや大野公民館の皆さんの行動は、思いやりの心の大切さを改めて感じさせてくれました。

（済生記者　田中一弥）

〈鹿児島〉川内病院
適時調査に備えて

全国済生会事務（部）長会医療政策・医事研究部会のワーキングチーム「WT-1B」の13人が、12月20日、模擬適時調査官として来院されました。

topicS

一行には調査前日から提出資料を確認していただきました。当日も調査書に沿ったヒアリング、院内ラウンド、提出書類の根拠等、隅々まで確認。ヒアリングや講評等で多数の指摘事項やアドバイスをいただき、改善すべき点等を認識することができました。

厚生局による適時調査に備えて指摘のあった点を改善し、適切な施設基準の運用・管理を行なえるよう取り組んでいきます。

（医事管理課主任　石原　肇）

〈山形〉特養ながまち荘
「やっているかも」がセクハラ防止の第一歩

1月10日、社会保険労務士の浦山一豊氏を講師に招き、職場でのハラスメント防止について研修を行ないました。

当日は40人の職員が参加。昨今ではLGBTQ等、性の多様性を耳にする機会が増えたこともあり、今回は「セクシュアルハラスメント」について重点的に話していただきました。

印象的だったのが、「『やっているかもしれない』と思うことがセクハラ防止の第一歩」という言葉。世代や関係性によって、不快に思う言動には大きなギャップがあることを意識してコミュニケーションを図ることも重要です。

仕事上の立場や性別にかかわらず、互いにかけがえのない個人として尊重し、あらゆるハラスメントを許さない職場環境を全員で作っていきます。

（済生記者　髙見友郁）

熊本福祉センター
幹部職員研修会

幹部職員研修会を11月23日に済生会ほほえみ多目的ホールで開催し、28人が参加しました。

午前は小西忠光事務長から収支状況報告、各事業所から上半期報告と下半期目標発表がありました。午後は宮川栄助所長から事業活動進捗状況や今後の施設整備計画について説明があり、各事業所から来年度の取り組みについて報告がありました。

参加者からは「福祉センターの今後の施設整備計画、事業計画についてよく理解できた」「収支状況や人材確保の厳しさがよく理解できた。センター一丸となって改善に取り組んでいきたい」といった声があり、非常に有意義な研修会となりました。

（総務室長　熊谷　誠）

〈福岡〉大牟田病院
医療安全部署活動報告会

11月21日から28日までの1週間、医療安全部署活動報告会を開催しました。

例年11月25日（いい医療に向かってGO）を含む1週間を「医療安全推進週間」とし、20年以上継続開催されています。コロナ渦以降は、職員参加型の口述発表からポスター発表へ形式を変更し行なっています。

今回は16部署のエントリーがあり、各部署のインシデント報告から要因分析・対策の立案・実施・評価、部署内での救急対応マニュアル作成、転倒リスク対策、業務改善など幅広いテーマの発表がありました。

参加職員の投票で決まる優秀賞には、認知症ケアチーム「せん妄対する取り組み」が選ばれました。認知症ケアチームの受賞は2年連続です。

（医療安全対策室　山下祐子）

topicS

1983年以降の長期の功績を認められ

京都済生会病院

令和5年度京都府保健医療功労者表彰式が11月28日、京都府公館レセプションホールで開かれ、当院の吉田憲正院長が西脇隆俊京都府知事から「京都府保健医療功労者」表彰を受けました。

当院は1983年に長岡京市に移転以来、また2019年に吉田院長が着任してからも引き続き、京都府乙訓地域（長岡京市、向日市、大山崎町）唯一の公的医療機関として急性期医療を提供。多年にわたる地域保健医療対策への尽力と功績が認められ、受賞となりました。

（済生記者　白須優也）

〈大阪〉野江病院

締めはもちろん六甲おろし

12月26日、当院1階ロビーで「なでしこふれあい年の瀬コンサート」を開催しました。コロナ禍でしばらく開催できない状態が続きましたが、昨年再開し今回で25回目となります。

音楽療法活動をしているピアニストの西山満理先生、ソプラノ歌手の石橋文恵先生、バイオリニストの穂積洋子先生にお越しいただき、約1時間にわたりさまざまな楽曲を披露していただきました。

当日はとても寒い日でしたが、患者さんや地域の人など約30人が集まり、すてきな演奏により心温まる時間を過ごすことができました。

最後に恒例の「六甲おろし」が演奏されると、阪神タイガースの優勝もあって会場は大きな手拍子が起こり大盛り上がり。笑顔あふれる最高の年の瀬となりました。

（済生記者　坂本千晶）

〈栃木〉宇都宮病院

ふくしのチカラフォーラムにパネリストとして参加

1月12日、高齢化や貧困など地域の課題を解決するための取り組みを発表する「地域で輝くふくしのチカラ実践フォーラム」が栃木県庁で開催され、90人が参加しました。

当院は昨年度の事例発表会で最優秀賞を受賞したことから、第3部のパネルディスカッションに当院の稲見一美地域連携課長が招待されました。

稲見課長（MSW）は、「誰も排除されない社会の実現のためには、当院のみでなく地域全体で取り組むことが必要。当院が行政や民間団体などのつなぎ役を担い、横につながるネットワーク構築を進めていきたい」と話しました。

（地域連携課　秋山綾香）

静岡済生会訪問看護ステーションおしか

優良安全運転事業所・管理者表彰受賞

長年にわたる安全運転が認められ、当事業所は11月27日、静岡南地区安全運転協会から優良安全運転管理事業所と優良安全管理者（清水靖子主任）の表彰を受けました。

日々の訪問業務で車を利用する当事業所では、安全運転についての講習会の実施や、年度初めにスタッフ一人ひとりの交通安全に対する心構えを事務所内に掲示するなど、各自が交通安全に対して強い自覚を持つようにしています。

令和4年より義務化されたアルコールチェックも、毎日勤務前に欠かさずスタッフ同士で行ない、安全を確認後業務に就くようにしています。

（所長　山田芳枝）

滋賀県病院

ACP研修会に60人

「栗東市地域ケア従事者研修会～地域で共に進めるACP～」を11月29日に開催し、支部職員と地域の多機関の職員合わせて60人が参加しました。

当日は、居宅支援事業所のケアマネジャーは「市内ケアマネジャーのACP（アドバンスド・ケア・プランニング）に対する意識調査報告」、特別養護老人ホームの相談員は「入所する利用者に関わるACPの現状や相談員としての困りごと」、当院医師は「入退院を繰り返す単身生活者のACPを振り返って」という内容でそれぞれ話題提供があり、多職種でのグループディスカッションを行ないました。

参加者からは「困りごとは各職種共通であることが理解できた」「何とかしたいと思っている人がたくさんいて心強かった」という意見が聞けました。

（患者支援センター副部長　日置康志）

〈奈良〉御所病院

食と農のフェスタ

奈良県と御所市の農業・酪農・養鶏組合が消費者へのPRを目的とする「食と農のフェスタ」が、11月12日に御所市葛城公園で開催され、当院から職員8人が参加しました。

啓発イベントスペースでは、御所市の関連部署の皆さんとともに血圧測定・SpO_2測定・血糖測定、それに伴う健康相談、無料低額診療事業パンフレットの配布を、多職種（放射線技師、検査技師、理学療法士、看護師ほか）で行ないました。

とても寒い日でしたが、2時間弱の間に100人以上が来場。「健康状態が気になっていたが、自分の状態がわかってよかった。近く受診します」といった言葉もありました。

（地域医療連携室　北田三千恵）

topicS

〈鹿児島〉川内病院
給食の管理運営で厚生労働大臣表彰

当院は「令和5年度栄養関係功労者厚生労働大臣表彰（特定給食施設）」を昨年9月に受けました。これは、多年にわたり栄養改善に尽力し、その功績が特に顕著であると認められる者、および特に他の模範と認められる優良な特定給食施設を表彰するものです。

12月11日に伝達式が行なわれ、1月9日に寄山敏男院長と江口晶子栄養科科長代行が薩摩川内市役所を表敬訪問し、田中良二市長に受彰の報告をしました。

2人は「薩摩川内市と関係各機関の協力、また歴代の栄養科職員の努力の積み重ねへの感謝とともに、今後も引き続き、地域医療への貢献を目指したい」と喜びを語りました。

（済生記者　竹之内美和）

〈三重〉明和病院
初のオープンホスピタル

医療の現場を見てみたい、介護の仕事に就きたいという学生約40人（中学生～大学生）を対象に、12月26日、当院初の〝オープンホスピタル〟を開催しました。

当日は、施設見学、看護師・介護士・保育士・セラピスト（理学療法士・言語聴覚士）の職種に分かれて順番に職業体験をし、医療知識を深めてもらいました。

初めての開催で準備はバタバタ。時間配分もうまくいかず、体験時間を短くするなど課題も残りましたが、参加者全員から参加してよかったと言ってもらうことができました。学生たちの真剣な眼差しに、運営側として身が引き締まる思いでした。

（済生記者　藤岡拓人）

〈三重〉松阪総合病院
済生会フォーラム&支部表彰

第47回済生会フォーラムを11月11日に開催し、当院と明和病院から5人ずつ計10人の演題発表が行なわれました。

演題の内容はリハビリ、医療安全、検査、災害訓練、看護などさまざま。その中から、明和病院の山本公子看護師が発表した「認知症ケアチーム（DCT）の成果と課題」が、最優秀演題に与えられるフォーラム賞に見事輝きました。

その後、3回目となる三重県済生会職員表彰式が行なわれ、「学術功労賞」「業務奨励賞」「善行賞」「特別功労賞」の表彰区分で、松阪総合病院と明和病院で合わせて12人の職員が表彰されました。

（医療情報システム室　小川修誉）

〈山口〉下関総合病院
目指せ、4年連続最優秀展示

当院では毎年、医療安全週間（11月25日を含む1週間）に、医療安全チームによる院内ラウンドと標語の募集、各部署の医療安全への取り組みをパネル展示しています。

医療安全標語は2年連続検査科で、「焦らずに　手順を守って　事故防止」（丸田実幸さん作）が選ばれました。

パネル展示は3年連続で救急部が最優秀賞に選ばれました。今回は、患者搬送時から入院までを〝すごろく〟に見立てています。展示を見た患者さんが「とてもいいポスターなので、自分の仕事の参考にしたい」と写真を撮影していました。

（救急部　清水倫子）

〈栃木〉うつのみやなでしこ保育園
子どもを守れるのは保育士しかない

当園では毎月避難訓練を行っています。1月12日、宇都宮中央消防署の職員4人の協力を得て、園児59人と職員27人が参加して火災を想定した消防訓練（通報・避難誘導・消火）を実施しました。

まず通報訓練は、実際に火災通報装置を使って消防署に通報しました。避難誘導訓練は、初期消火に駆けつける保育士、エリアを確認し一斉放送や避難開始を指示する園長、避難の準備とともに避難補助をする保育士など、役割分担を明確にして行ないました。

全員が園庭に避難した後は消防隊員の指導のもと、10人の保育士が水消火器で消火訓練を行ないました。

消防訓練を通して、実際に災害が起きたときに、子どもを守れるのは保育士しかないということを改めて自覚した一日でした。（保育施設事務　福田　郁）

〈埼玉〉川口総合病院
「マネジメントレビュー」で病院の〝今〟を知る

12月11日・19日の2日間、職員を対象に病院のさまざまな取り組みや現状、今後の課題などを知らせる「マネジメントレビュー」を開催しました。

今回発表されたテーマは7題。今年度からスタートした「入退院支援センターの運用状況」、「全面院外処方箋移行に伴う薬薬連携」、昨年5月に実施された「電子カルテ更新後の状況」、来年度からスタートする「医師の働き方改革」など、どれも興味ある内容ばかりでした。

2日間で合計115人が参加し、職員として「知りたい」「聞きたい」と思っていた病院の〝今〟を知る貴重な時間となりました。発表内容についての質疑応答は、後日全職員に院内職員用ネットでも公開されます。

（企画経営課　井上美智子）

〈大阪〉野江特養城東園
クリスマスフラワーアレンジメント

12月17日、クリスマス行事の一環でフラワーアレンジメントを行ない、入所者さん20人が参加しました。近隣のフラワーアレンジメント教室「花のビーンズ」の西尾真理先生をはじめボランティアの協力により、この時期の恒例行事となっています。

クリスマス用ということもあり、いつもとは違う雰囲気で皆さん一生懸命アレンジに取り組んでいました。

出来上がった作品を前に「きれいやね、また来年もお願いしますので、私の顔を覚えていてくださいね！」「クリスマスの気分になった」とたくさんの笑顔が見られ、楽しい時間が過ごせました。

（係長・相談員　中西茂人）

〈福岡〉大牟田病院
エアストレッチャー利用し垂直避難誘導訓練

11月15日に秋季の消防訓練を実施し、52人が参加しました。

今回は6階病棟給湯室を出火場所に想定。あらかじめ各部署に通報係・初期消火係・避難誘導係などの役割を割り振り、火災発生から避難完了までの一連の流れに取り組みました。

また、新たに「エアストレッチャー」を利用した垂直避難誘導訓練を行ないました。初めての利用でセッティングに手間取る場面もありましたが、患者役スタッフからの反応もよく、安全に搬送を行なうことができました。

他にも防煙垂れ壁や防火戸といった普段稼働しているところを見ない設備を、業者の協力を得て職員が実際に稼働経験できたことで、非常設備の取り扱いを具体的にイメージすることができました。

（庶務課　羽田昂生）

〈神奈川〉横浜市東部病院
高額寄付者へ感謝状

2012年から計4回にわたり、当院に高額寄付をしてくださった針谷佳充氏に12月15日、感謝状と名誉会員章、そして記念品を進呈しました。

ご家族に医療関係者がいて病院が身近な存在であったこと、当院に通院し今は元気になったことなどが寄付の動機だそうです。「病院も大変だと思います。お役に立てていれば何よりです」とのお言葉をいただきました。

いただいた寄付金は済生会の事業をはじめ診療設備や療養環境の整備、人材の育成などに充てる予定です。なお針谷氏は、これまでは有功会員で、今回名誉会員になりました。

（済生記者　荒木愛美）

topicS

〈大阪〉吹田病院
地域全体で在宅医療を〝ともに〟考える

12月14日に「第3回在宅をともに考える会」を開催し、院内外合わせて82人が参加しました。

はじめに「地域を知る」とし、吹田訪問看護ステーションの児浦博子所長が「訪問看護の立場から在宅での内服管理」について講演。続いて「病院を知る」とし、薬剤部の東野公亮薬剤師が「当院における薬剤管理～入院から退院まで～」をテーマに講演。その後、参加者を交えて意見交換会を行ないました。

WEB参加の在宅薬剤師からも在宅の現状を聞くことができ、地域全体で内服管理について考える貴重な時間となりました。

今回はこれまで以上に地域の方々から活発な意見があがり、参加者は内服管理について多職種で考えていく必要性をそれぞれの立場で意識することができました。

（ホームケア支援課主任　加藤尚子）

〈栃木〉宇都宮病院
多機関での中央ブロック連携会議

12月20日、エリア内の地域包括支援センター・医療・介護関係者、行政職員を含む52人が参加して、今年度3回目の中央ブロック連携会議をオンラインで開催しました。

はじめに、宇都宮市保健福祉総務課・地域共生推進室が宇都宮市の抱える課題や地域共生社会の概要、重層的支援体制整備事業について講演。その後、5地域包括支援センターが各取り組みを発表しました。

稲見一美地域連携課長は「相談者の抱える問題は複雑化・複合化しており、関係機関が協働して対応することが重要。このような会議で顔の見える関係づくりの機会は貴重だと考えている」と、開催意義に言及しました。

（地域連携課　秋山綾香）

〈東京〉中央病院附属乳児院
手作りお菓子の会

地域で活動をともにする戸板女子短期大学食物栄養科の学生8人と指導する先生方が、8月25日に当院を訪れ、「手作りお

載々

済生会の職員が寄稿した記事が、掲載された雑誌等を紹介します

菓子の会」（ボランティア活動）を開いてくれました。

初めて見るお姉さんたちに子どもたちは緊張した様子でしたが、やさしく声をかけられ一緒にお菓子作りを体験することができました。

今回作ったのは「スノーボール」。粉をヘラでこねたり、ボール状に手で丸めたり、思い思いにお菓子作りを楽しんでいました。

普段は食が細い子が、甘くておいしいスノーボールを夢中で食べ、おかわりしていたのがとても印象的でした。2月に第2回を予定しており、今から楽しみです。

（済生記者　新井保久）

インクルーシブ社会の実現を目指して

福井県済生会病院　齋藤事務部長

「病院経営羅針盤」2023年12月15日号（産労総合研究所）の連載「済生会のソーシャルインクルージョン」第11回に、当院の齋藤哲哉事務部長が寄稿した。

昨年10月、済生会と株式会社良品計画は「インクルーシブ社会・感じのよい暮らしと社会の実現に向けた連携協定」を締結。本記事では、締結以前から当院が良品計画と協力し行なった、地域を巻き込んださまざまな活動を紹介している。

最初のコラボレーションとなった立体駐車場のバス待合室のデザインや、院内での出張販売会の開催により、地域の人々が集まる機会が増加。これにより、生活サービス機能の拡充や高齢者が地域で安心して暮らせる環境づくりに貢献し、誰もが取り残されず参加できる地域社会の実現を目指していると締めくくっている。

（総務・企画課　高島　孝）

アセスメントとおむつの知識 両輪で快適な排泄ケアを実現

〈大阪〉吹田病院　間宮副看護部長

「シルバー産業新聞」令和5年11月10日号に、当院の間宮直子副看護部長と在宅創傷スキンケアステーション岡部美保代表の対談「岡部と間宮のここだけの話！　本日開業！　おむつ外来」が掲載された。昨年7月開催の第32回日本創傷・オストミー・失禁管理学会で好評を博したセミナーのダイジェスト版で、皮膚・排泄ケアに精通した2人が現場でのおむつの悩みに応えている。

「おむつを知ること」は認知症患者が増加する中で一層大切になってくる。そして「アセスメントが適切なケアに結びつくように各々の患者さんの状態を正しく評価すること」「多種多様なおむつの知識を得ること」の両輪で、患者さんや利用者さんの快適な排泄ケアやQOLの向上につながると、皮膚・排泄ケア認定看護師、特定看護師の立場から間宮副看護部長は述べている。

（済生記者　橋本　茜）

大雑報

身の回りで起きた、さまざまなことを楽しく報告するコーナーです。職場の話でも、家庭の話でも、休日の話でも。ご報告ください

おいしい焼きいもで「笑顔になろう」

〈島根〉高砂ケアセンターでは、11月28～30日に当施設で収穫したさつまいもを焼きいもにして、入所者さん・利用者さんにふるまいました。

今年は例年に比べやや不作でしたが、味はどこにも負けていません。皆の喜ぶ顔が見たい一心で、職員手製の焼きいも器と豆炭を用い、香ばしく焼き上げました。焼きたてほやほやを見て目の色が変わる人（普段の倍に開いた瞳！）、おしゃべりを忘れ夢中で頬張る人（急に静か……）、幸せをかみしめて食べる人（職員まで幸せ！）、普段は制限があり食べられないけど何とか工夫をして食べることのできた人（至福のひととき！）、隣の人にばれないようにこっそりおかわりをもらっている人（こういう欲も大事）。

「おいしい」「甘い」「幸せ～」と皆笑顔にあふれた日となりました。「笑顔になろう」パート2、完！

（島根・高砂ケアセンター　リハビリテーション科　横　恵美子）

★パート1（12月号）に続く〝食〟にまつわる笑顔の物語。さてパート3は如何（いか）に!?

（本部広報室　河内淳史）

福井文学賞「最高賞」受賞！

第21回福井文学賞（中日新聞社・日刊県民福井主催）の表彰式が12月3日、ザ・グランユアーズフクイで行なわれ、福井県済生会病院のケアアシスタント・丸山久美さんが見事、最高賞の第1席に輝きました。

受賞作は「海が舞う」。生き生きとした老後を一方的に押し付ける風潮と無理矢理に排除されるホームレスの苦境を見つめ、現代社会の苦悩を描き出した力作です。

丸山さんは2019年に福井文学賞に初挑戦。短期間でのこの偉業は素晴らしいことです。丸山さんは「これからも書くぞという意欲が湧きました」と語っており、新たな作品が再び私たちを感動で包む日を期待しています。

（福井県済生会病院　済生記者　田中一弥）

★高齢者やホームレスの苦労を医療従事者の視点で描いた作品だからこそ読者に響くものがあるのだと思います。

（本部広報室　河内淳史）

全力埼玉ポーズ

12月の冬のある朝。澄み渡る青空の下、整形外科の医師たちと私は学会資料に使用する集合写真を撮影するため病院屋上へ。

ひんやりとした清々しい空気の中でひとしきり撮影した後、「埼玉ポーズもしてみませんか?」と医師たちに無茶ぶりする私。ちなみに埼玉ポーズとは、映画『翔んで埼玉』で一躍有名になった、両手OKサインを胸の前でクロスした、埼玉県鳥のシラコバトの羽と埼玉の〝玉〟をイメージしたポーズのことです。

するとまさかの即OKで、ノリノリで全力埼玉ポーズを決めて下さった当院の医師たち。最高です！

（埼玉・川口総合病院　済生記者　原　衣里奈）

★私も埼玉県民なので草、食べてます（笑）。滋賀支部に声掛けときますので一緒に琵琶湖の水を止めましょう。

（本部厚生課長　平井　滋）

濱岡さん、ありがとう！

12月22日に濱岡カヅ子さんから新年を迎えるにふさわしい大作をいただきました。

濱岡さんは〈愛媛〉松山老健にぎたつ苑の利用者さんです。籐（とう）細工の名人で、コロナ禍には本部にアマビエの作品を送ってくれました。（本誌2023年7月号・大雑報）

今年は元日から災害や事故が相次ぎましたが、この逸品を眺めている

と幸運をもたらしてくれる気がします。

作品はこの記事と一緒に本部の研修室に飾る予定です。皆さん、本部に来たらぜひ見てください。

（本部広報室　河内淳史）

100歳、おめでとう

1月5日は、かごしま介護医療院に入所する川付澄子さんの満100歳の誕生日。

当日は、妹さん夫婦が面会にいらっしゃいました。「優しい姉が100歳を迎えることができたことに感謝の日々です」――ご家族の祝福の声に、にっこり笑顔を見せる川付さん。職員からもメッセージと祝い鶴をお渡しし、ご家族と一緒に百寿をお祝いしました。

川付さんは2002年に済生会鹿児島地域福祉センターの軽費老人ホームに入所後、心身の変化に応じて同センターのサ高住、グループホームで生活。その間の2018年から鹿児島病院の訪問診療を利用するようになり、昨年当院への入院を経て、12月から介護医療院に入所中です。20年以上にわたるご縁のつながりには感慨深いものがあります。

（鹿児島病院　済生記者　竹中康代）

★いくつになっても、きょうだい仲がいいのは素敵ですね。なかなか会えない兄のことを思い出しました。

（メディカル・リーフ　坂本陽子）

美しい灯ろうで「笑顔になろう」

廊下の角を曲がると、そこは神秘の空間――〈島根〉高砂ケアセンターの職員3人が中心となり、ここ数年、冬の時期に施設の廊下に竹で作った灯ろうを飾っています。

夕暮れ迫る午後5時頃に竹の中のLED電球を灯らせ、火の番は夜警さんにバトンタッチ。

夜9時頃まで廊下の両側に10数個の灯ろうが並び、訪れる利用者さん家族や職員の目を楽しませています。

また、窓がないゾーンなので昼間でも灯ろうに明かりを灯し、通所リハビリ利用者さんの歩行練習のきっかけにも。

「灯ろうを見に行こう」「よく作ったね」など利用者さんの間で話題になっています。「笑顔になろう」パート3、完！

（島根・高砂ケアセンター　リハビリテーション科　越智田将仁）

★幻想的できれいですね。手作りというのが一層温かみがあって、癒やされそう！

（本部広報室　杉山菜央）

〝使えるビンテージ食器〟を喜寿祝いに

11月19日に77歳を迎えた老健はまな荘・隅井浩治施設長に、施設運営会議のメンバーから喜寿のお祝いとして花束と記念品を贈りました。本来なら数え年で77歳になる昨年お祝いする計画でしたが、コロナ禍で開催できず延期されていました。

隅井先生は大のコーヒー好き。記念品には普段使いできるコーヒー関係のものをと皆で知恵を絞った結果、マグカップに決定。米アンカーホッキング社でかつて製造されていた耐熱ミルクガラスの製品ブランド「ファイヤーキング」のもので、先生には喜寿のシンボルカラーの紫に一番近いターコイズブルー、同じく今年77歳の奥様にはピンクのカップをお贈りしました。

「大切に使わせてもらいます」と隅井先生。その日の夕食後のコーヒーに早速使っていただいたようです。

（広島・老健はまな荘　済生記者　佐藤　聡）

★南国の海と夕日のようなすてきなカラーですね。夕食後にどんな会話が交わされたのでしょうか。

（本部広報室　河内淳史）

4年ぶりのお餅つき

〈愛媛〉西条特養で12月20日、餅つきを4年ぶりに行ないました。3回に分けて実施し、特養の入居者さん、ショートステイ・デイサービスの利用者さん合わせて130人ほどが参加しました。

厨房から炊きたてのもち米が運ばれると、辺りはもち米の甘い香りでいっぱいに。入居者さん・利用者さんと職員で杵を使ってお餅をつきました。普段は車椅子の方も自ら立ち上がり、職員に支えられながらしっかりと立ってお餅をつくことができました。皆の「よいしょー！」の声が響き、会場は大盛り上がり！

つきたてのお餅を丸める作業も皆さんにやっていただくことに。「懐かしい」「昔はよくやっていた」とおしゃべりにも花が咲き、慣れた手つきであっという間に6升分のお餅が出来上がりました。

入居者さんには安全面を優先し、「お餅風ムース」のおしるこで年末気分を味わっていただき、完成したお餅は職員がおいしくいただきました。

（愛媛・西条特養　済生記者　中野佳弥）

★磯辺焼きに、砂糖醤油、きな粉やあんこ、肉巻き、ピザ風……。ついつい食べ過ぎちゃいます。

（本部広報室　杉山菜央）

大笑いの餅つき大会！

1月9・10・11日の3日間、お正月恒例「デイサービス餅つき大会」を開催しました。

当日は50人の利用者さんが参加。法被を着て、頭に手ぬぐいを巻いたら準備完了です。そして杵を持ったとたん、利用者さんの顔つきが本気モードに！　職員の「せーの、よいっしょ！　よいっしょ！」のかけ声に合わせて、力強く杵を振り下ろします。うまく餅をつく人もいれば臼の縁に振り下ろす人もいて、真剣な表

次号予告

済　生　No.1137［令和6年3月号］

済生会の不易流行論（186）　炭谷　茂
済生会学会・総会特集
能登半島地震 災害対応
この人　松藤史恩
口福にっぽん（78）　土佐田舎寿司キット（高知県高知市）
てづくりおもちゃ　いまいみさ

広告索引

三井住友銀行
――― 表紙見返し［表紙2］

知る・見つける・支える

ソーシャル インクルージョン

Social Inclusion シンク!

はじめまして、シンク！です。

済生会が推進するソーシャルインクルージョンを、
多くの人々に知ってもらうためのウェブメディアができました。

サイト名は「知る・見つける・支える ソーシャルインクルージョン」。
愛称の「シンク！」は、social inclusionから名付けました。
think（思いを巡らせる）、sync（共感する、シンクロする）という意味も込めています。

済生会内外のさまざまな活動の記事を通して、ソーシャルインクルージョンの
実現を目指す人々の思いを知り、共感し、そして仲間になってほしい。

それがシンク！の思いです。

知る・見つける・支える
ソーシャル
インクルージョン
Social Inclusion シンク!

https://www.socialinclusion.saiseikai.or.jp/

情も一気に笑顔に。会場は笑いの渦に包まれました。

「昔は三升（4・5キロ）ついたもんだー！」「ながまち荘の臼はちゃっこくて（小さくて）何回も餅ばつかんなねなあ（笑）」と昔を懐かしむ利用者さんも多く、大盛り上がりの餅つき大会になりました。

（山形・特養ながまち荘　介護職員　鈴木郁苗）

★皆さんなんといい表情！　こんた心のこもった餅っこ、んめにきまっでらー！

（メディカル・リーフ　富谷咲希）

移動式神社で初詣！

今年の元旦は、夜中に大雨が降っていましたが、朝方には晴れて施設からきれいな初日の出を見ることができました。

（滋賀）老健ケアポート栗東では利用者の皆さんが新たな気持ちで新年を迎えられるように、ワゴンの移動式神社を作成。利用者さんの目の前に神社を運んでいくと、初詣の思い出を懐かしんだり、「今年も楽しく過ごせますように」と改めてお願いしたり、皆さん喜んで手を合わせてくださいました。

〝お参り〟後は運試しのおみくじ！

一人ひとり筒を振ってもらい、出た番号のおみくじをお渡ししました。内容を隅々まで読んでいる方もいれば、大吉を引いて「当たった！」と拍手して喜ぶ方も。皆さんにお正月行事を楽しんでいただくことができました。

（滋賀・老健ケアポート栗東　介護福祉士　佐々木りつ子）

★デリバリー神社、なんて画期的！元旦のお願いごとが神様に届き、皆さんが一年元気で過ごせますように。

（大空出版　後藤藍子）

済生会

明治44年2月11日、明治天皇は、時の総理大臣桂太郎を召されて「恵まれない人々のために施薬救療による済生の道を広めるように」との済生勅語に添えてお手元金150万円を下賜された。桂総理はこの御下賜金を基金として全国の官民から寄付金を募って同年5月30日恩賜財団済生会を創立した。

以来今日まで112年、社会経済情勢の変化に伴い、存廃の窮地を乗り越えるなど幾多の変遷を経ながらも、本会は「施薬救療」という創立の精神を引き継いで保健・医療・福祉の充実・発展に必要な諸事業に取り組んできた。

戦後、昭和26年に公的医療機関の指定、同27年に社会福祉法人の認可を受け、現在、社会福祉法人恩賜財団済生会となっている。

総裁　秋篠宮皇嗣殿下
会長　潮谷義子
理事長　炭谷　茂
本部＝東京　支部＝40都道府県
病院　81
診療所　20
介護医療院　2
介護老人保健施設　28
救護施設　1
児童福祉施設　25
老人福祉施設　120
障害者福祉施設　9
看護師養成施設　7
訪問看護ステーション　64
地域包括支援センター　31
地域生活定着支援センター　5
その他　10
合計　403（数字は令和4年度）

さらに巡回診療船「済生丸」が瀬戸内海の60島の診療活動に携わっている。

職員数は全国で約6万4000人。

済　生［令和6年2月号］
THE NEWSLETTER of
Social Welfare Organization
Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.

令和6年2月10日発行
通巻第1136号（第100巻第2号）
編集兼発行人　炭谷　茂
発行所　社会福祉法人恩賜財団済生会
〒108-0073
東京都港区三田1-4-28
三田国際ビルヂング21階
TEL：03-3454-3311（代）
FAX：03-3454-5576
印刷所　株式会社白橋
東京都中央区八丁堀4-4-1

©社会福祉法人恩賜財団済生会

済生 THE NEWSLETTER of Social Welfare Organization Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.
第136号 (第100巻第2号)
令和6年(2024年)2月10日発行(毎月1回・10日発行)
編集兼発行人 戸谷 茂
社会福祉法人恩賜済生会
〒108-0073 東京都港区三田1丁目4番28号 三田国際ビルヂング21F ☎03-3454-3311(代)
令和6年 2月号

なでしこファーム

熊本、松山から「冬の愛」をお届けします！

熊本済生会ほほえみ「パン工房ふわり」
熊本県熊本市南区内田町3560-1 Tel: 096-223-3428

松山ワークステーション「なでしこ」
愛媛県松山市東山町143番地 Tel: 089-916-6959

焼き菓子のネット通販店「なでしこファーム」

なでしこファームは、済生会の就労継続支援事業所で作ったお菓子を販売するネット通販店。
熊本・済生会ほほえみと愛媛・松山ワークステーションが出店し、済生会のホームページ上で営業中です。
商品のクッキーやケーキは、障害者が街のお店に追いつき追い越せと、一生懸命つくりました。
どうぞ一度、その思いも一緒に召しあがってみてください。お歳暮にも最適です。　店主敬白

◆クッキー（左上から時計回りにマーブル、ゴマ、プレーン、クルミ）

♥ギフトボックス（クッキーとパウンドケーキの詰め合わせ）

♣くまドレーヌ（くまの形で、手軽に食べられる大きさのマドレーヌ）

♠元祖クッキー（片栗粉を使ったサクサクとした歯ごたえが人気）

済生会のトップページからアクセス!!
https://www.saiseikai.or.jp

ホームページには、他にも魅力いっぱいの商品が。工房で、お店で活躍するスタッフの様子も。ぜひご覧ください。

ISSN 1343-571X

P-B10139
グリーン・プリンティング
この印刷製品は、環境に配慮した資材と工場で製造されています。